
魔法少女リリカルなのは～仮面の戦士～

だかた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜仮面の戦士〜

【Nコード】

N3068X

【作者名】

だかた

【あらすじ】

とある世界に存在した

欲望から生まれたメダル

『コアメダル』

コアメダルから誕生した欲望を食らう存在

『グリード』

それらを封印した存在

『オーズ』

今、それらがミッドチルダに復活する

魔法少女リリカルなのは〜仮面の戦士〜

始まります

プロローグ

『欲望』

それは、多くの物を世に生み出した源

衣服も食べ物も建物も、人間が欲したから生まれた

欲望は何かの始まりであり、終わりである

欲望は人間が存在する限り、尽きる事無く永遠に続いていく

誕生と終末、何度も何度もそれを繰り返しながら・・・

そして、いつしか欲望は無限を超える存在になっていった

その昔、とある世界に1人の王がいた

その王は世界を支配する為に、力を欲した

そして、人間の進化の要である欲望に目をつけた

王は優れた錬金術師に指示し、人間の欲望を凝縮させたメダル

『コアメダル』と『セルメダル』を作らせた

10枚あったコアメダルはそのままではただのメダルに過ぎなかった

しかし、コアメダルを1枚抜いた途端、9という欠けた数字を埋めようとセルメダルが集まった

そして、『グリッド』という存在が生まれた

次に王はコアメダルを使用する為の装置を作り出した

3枚のメダルを使い、グリードという欲望の王達の更に上に立つ存在

人々はそれを『^{オーズ}000』と呼んだ

結局、王は世界を手に入れる事は出来なかった

その原因は、無欲な1人の旅人と心を持った1人のグリードだった

青年は王を恐れず、心を持ったグリードを救おうとした

間違っている事は間違っているという、当たり前事が言える青年だったのだ

グリードは付け焼刃に王と他のグリード達から奪ったもう1つのオーズの力を青年に渡した

青年はそれを使いこなしグリードが生み出すヤミーという存在を倒していった

そして、グリードが持つ『本当の欲望』に気付いた

虫系グリードは『誰にも負けない力を持ち、生きていたいという欲望』

猫系グリードは『傷付けられない自分だけの居場所が欲しいという欲望』

水棲系グリードは『愛するのではなく、誰かに愛して欲しいという欲望』

重量系グリードは『自分が好きになった誰かと一緒にいたいという欲望』

そして、鳥系グリードは『心を確かに感じる為の命が欲しいという欲望』

その簡単そうで難しい欲望を、青年は簡単に解決してしまった

「お前っていう存在が命その物だろうがぁー!!」

鳥系グリード『アंक』と戦い、そう叫んだ

「死にたくないなら、俺達が護ってあげるよ」

虫系グリード『コノハ』を護る為に、王の刺客と戦った

「居場所が欲しいの？じゃあ、一緒に探そっか！」

猫系グリード『ラト』と共に居場所を探し、居場所になった

「お前を愛してくれてる奴がすぐ傍にいるじゃないか」

水棲系グリード『シャル』に愛してくれている者がいると気付かせた

「何があっても、アイツを信じて傍にいてやってくれ」

重量系グリード『リク』に何があっても相手を信じろと教えた

そうする事で、青年はグリード達と共に戦い、失った10枚目のメダルを甦らせていった

それは、天敵同士のオーズとグリードの間に生まれた絆だった

そして、己の欲望に負け、暴走した王をグリード達と共に倒したのだった

世界に浸透してしまったグリードへの恐怖は消し去れる物ではなかった

何処に行っても蔑まれ、何処に行っても忌み嫌われた

時折、青年達を理解してくれる人達もいた

しかし、そんな人達が自分達のせいで傷付けられるのを見て、青年はある決意した

青年の決意に他のグリード達も賛同した

そして、青年とグリード達は永い眠りに付く事になったのだった

それから、800年の時が過ぎた――

封印の棺と封印を施した戦士の銅像は時空管理局に回収された

それが、後に大事件を起こすとも知らずに・・・

第1話『目覚めとオーズと旅立ち』

第1話『目覚めとオーズと旅立ち』

ミッドチルダ

時空管理局ロストロギア保管倉庫

そこに、1つの棺が存在した

それは、とある世界に存在したロストロギアの反応がした棺

管理局はロストロギアが封印されている物だと判断し、回収した

「これね、ドクターが言っていたのは」

そこに、1人の女性がやって来た

女性は棺の上の部分にあった3つの何かが入る部分がある突起を回した

その瞬間、棺に亀裂が入り、その亀裂が輝き始めた

「これでいいのかしら？まあ、あとはどうとでもなるでしょう」

そう言って女性はその部屋から逃げるように出て行った

しかし、棺の一部が壊れ、先に赤のメダルが10枚出ている事には女性は気付かなかった

棺は綺麗に消え去り、中からメダルが飛び出した

緑が7枚、黄が7枚

青が7枚、銀が7枚

大量のセルメダルがそれぞれのメダルを包み込み、人の形を成して行った

「・・・あれ？何処だここ？それに、何か縮んでる！？」

緑色の髪をした少女が部屋の中を見渡して言う

「随分と未来的だね。身長が縮んでるのは、たぶん封印の影響だよ」

黄色の髪をした少女が窓から外を見て言う

「・・・これ、なんだあ？」

「勝手に触っちゃダメよ！」

銀色の髪をした少年が部屋の壁にあった赤いボタンを押そうとしたのを青い髪をした少女が止めようとした

しかし、止めた時には既に遅く、少年は赤いボタン・緊急事態を知らせるベルを鳴らしてしまった

「な、何か、もしかしてヤバイんじゃない!? 『ラト』!」

「もしかしくなくてもヤバイよ、『コノハ』」

少し焦りを見せて言うコノハにラトは落ち着いた様子で返す

「もう！『リク』！いつも勝手に触っちゃダメ！って言ってるでしょ！」

「ごめんなさい、『シャル』・・・」

ボタンを押してしまったリクをシャルが叱っている

「お説教中悪いけど、今は逃げようよ。シャル」

「・・・わかったわ。行くわよ、リク」

「うん」

「脱出だ」

4人はメダルに戻ってその部屋の窓から飛び出し、逃げ出した

管理局員が駆けつけた時、既にそこには誰もいなかった

4人は街外れの森の中に逃げ込んでいた

「ここまで逃げれば大丈夫かな？」

「さあ？人間の技術が進歩してれば、見つかるんじゃない？」

コノハとラトは逃げて来た方を見て追っ手がいなか確認しながら言う

「ごめんなさい・・・」

リクが申し訳なさそうに2人に言う

「べ、別にリクを責めてる訳じゃないよ？」

コノハは泣きそうなリクに慌てて言う

「そうだよ、リクが押さなくてもその内コノハが押してたよ」

ラトが爽やかな笑顔でリクの肩に手を置いて言った

「どついう意味だ!？」

「僕達の中でボタンを押しそうなのは、子供のリクか馬鹿なコノハだけだよ」

ラトはやれやれと言った呆れた様子を見せてコノハに言う

「コノヤロ〜!!目覚めてもそれか〜!!」

コノハはラトに掴み掛かろうとしたが、シャルに水を掛けられて落ち着いた

「・・・『アंक』は？」

今まで黙っていたリクが一緒に眠っていたはずのアंकがいない事に気がついた

「そつえばいなかったわね。先に目覚めたのかしら？」

シャルがアंकが自分達より先に目覚めたのかと推測した

「わかんない。あ、無いと言えば私、コアメダルが3枚無いんだけど。知らない？」

コノハがもしかして無くしたのかなあ・・・と不安になって呟いている

「ああ、それなら、アंकが握ってたよ。すぐに何処かに行ったみたいだけど」

ラトは思い出したように言った

「私達全員から3枚ずつ抜いて行ったのね」

「でも、何の為に持ってたの？」

シャルがそつ言つとコノハが首を傾げる

「はぁ……。僕達から3枚ずつ抜いて行って、アंकがする事って言ったらアレしかないでしょ」

ラトは呆れたようにコノハに言った

「アレ？」

コノハはまだわからないのか首を捻って考えている

「……『映司』」

「ほら、リクでもわかってるよ」

「リクとコノハを比べないでくれる？リクに失礼よ」

シャルはリクの頭を撫でながらラトに言った

「ガーン……」

コノハは1人でorz状態になっていた

ここは、もう1つのロストログア保管庫

「・・・ここか」

そこに、1人の少年が侵入していた

少年は倉庫の中を見回して探しモノを探す

そして、1つの銅像を見つけた

顔はタカ、腕はトラ、足はバツタを模した姿をしている

「・・・映司、人間は何も変わってないぞ。いや、酷くなってるかもなあ」

少年は嘆くように銅像に向かって言う

「それでも、お前は何かあれば戦うんだろうな」

少年はそう言って手を前に出す

すると、手が赤い鳥の様な形態に変わった

少年は手から棺の突起部分だった物を取り出す

そして、銅像の腰に当てた

その瞬間、岩が弾け飛び、『オーズドライバー』に変わった

少年はドライバーに変わったそれに3枚のメダルを入れる

そして、横に付いていた『オースキャナー』でメダルをスキャンした

《TAKA!》《TORA!》《BATT!》

《TA・TO・BA!TATOB!TA・TO・BA!》

スキャナーから不思議な歌が流れると銅像が光を放ち、色を変えて行く

黒い身体に顔が赤、腕が黄、足が緑の部分がある戦士に変わった

「・・・あれ？・・・アंक？」

戦士はアंकに気付いて話し掛ける

「・・・アंकがいて俺が動いてるって事は……。ありやりや、封印が解けちゃったんだな」

戦士は身体の間接を伸ばしながら言う

「ありやりやで済みますのか。まあいい、早くしろ、映司。ここを出るぞ」

「え？あ、そういえば、ここ何処なんだ？」

戦士は腰のベルトを外しながらアंकに尋ねる

ベルトを外すと戦士は黒髪の少年に戻った

少年の名前は『火野映司』である

「俺も知らない。まあ、気に入らないって事は間違いないな」

アंकは映司にそう言いながら倉庫の出口に向かっていく

「てか！俺達なんか身長縮んでないか！？どうなってんだよ！？」

映司は自分の身体とアंकを見て言った

「俺が知るか！取り合えず、ラト達と合流するぞ！さっさと来い！」

アंकはそう怒鳴って先に行ってしまう

「あ、ちょっ！待てよアंक！」

そんな感じで2人は倉庫から出た

映司とアंकが倉庫から脱出し、クラナガンの街中を歩いていた

辺りはすっかり夜になってしまっている

「うわぁー！おい、凄いぞ！アंकー！」

映司はミッドチルダの夜の街を見て興奮し、アंकの背中をバシバシ叩きながら言う

「映司！いい加減にしろ！子供かお前は！！」

そんな映司にアंकは怒鳴った

「いやー、だって未来にタイムスリップしたんだぞ？興奮しないのか？」

映司は未だ興奮気味にアंकに言う

「まあ、800年も寝てれば人間の技術も進化するだろうな」

アंकは高層ビルや車などの乗り物を見て言う

「人間の欲望も随分変わったな。より強く、でかくなった・・・」

アंकは街を行き交う人々を見て言う

「まあ、しょうがないよ。それが人間だもん。行こう？アंक」

映司はそう言ってアंकの前を歩いて行った

2人は街の中を更に歩いていく

そして、怪しい場所に辿り着いた

「・・・お前を先に歩かせたのが間違いだった」

アंकは何かを後悔するように映司に言った

「何が？」

映司はアंकの後悔の訳がわからず首を傾げる

「お前はトラブルに巻き込まれるのが大の得意分野だろうが!!」

アंकは惚けた顔をしている映司に向かって怒鳴った

「・・・ああ、それは悪かった。ごめん」

「ったく・・・。ん？」

アंकは何かに気付いたように暗闇を見つめた

「ん？どうしたんだよアंक？何か見えるのか？」

映司もアंकが見つめている先を見る

しかし、映司には何も見えなかった

「傷だらけの女がいる。あと、追っ手もいるなあ」

「えっ！？じゃあ、助けないと！！」

「・・・お前がここに来た意味がわかった」

走り出した映司を追う様にアंकも走り出した

暗闇の中を『クイント・ナカジマ』は走り続けていた

彼女は仲間達と共に特秘事項の捜査中、何者かの襲撃を受けた

仲間達は自分を逃がし、家族の為に生きる様にと言ってくれた

彼女は必死に痛む身体に鞭を打って走り続けた

・ 仲間を助ける為に、仲間の無念を晴らす為に、そして家族の為に・

どれだけ走ったかわからない、どれだけあそこから離れたか分からない

仲間達を置いて自分は走り続けている

救援を呼ぶ為に、仲間が生きっていると信じて走り続けた

しかし、彼女のその思いは打ち砕かれた

「見つけたぞ、生き残りだな」

そこにいたのは先ほどいた敵の内の1人だった

紺色の髪をしたショートカットの女性だった

「くっ！」

「悪いが、あそこに立ち入った以上は死んでもらう！」

体が思うように動かない、体力が限界だ、もう駄目だとクイントは悟った

自分の人生が、自分の歩んできた道が、ここまでなのだと・・・

「ごめんなさい・・・アナタ、ギンガ、スバル・・・」

静かにクイントは目を閉じた

「IS発動、ライドイン・・・ッ!？」

女性が何かを発動させようとしたその瞬間、何かがぶつかった

それは、強力な火炎弾だった

「間に合ったあゝ」

クイントは霞む目を必死に開き、声の持ち主を見た

そこにいたのは、変わった民族衣装を着た少年とおしゃれな服を着た少年だった

「貴様等！何者だっ！！」

「通りすがりの旅人とグリードだ！アंक、その人を頼む！」

映司は目の前にいる女性を睨み付けながらアंकに言う

「まったく、また何の得にもならない事を！」

アंकはそう言いながら女性の前に腰を下ろすと、映司にメダルを投げ渡す

「悪い！でも、これが俺だから！」

映司はそう言ってドライバーを腰に当て、装着した

アंकから渡された3枚のメダルを入れる

そして、横に取り付けられていたオースキャナーでメダルをスキャンした

「変身！」

キン！キン！キイインッ！

《TAKA!》《TORA!》《BATA!》

円形の様々な色の力の紋章が映司の周りを踊る

そして、映司の胸に紋章が刻まれ、力が宿った

《TA・TO・BA!TATOB A!TA・TO・BA!》

不思議な歌が流れ、光が収まった時、そこにいた映司の姿は変わっていた

黒のボディ、胸部の中心にあるサークルに刻まれた『鷹』『虎』『飛蝗』

『鷹の視力』が備わった赤の顔

『虎の爪』が装備された黄の腕

『飛蝗の脚』が備わった緑の脚

欲望の王『^{オーズ}〇〇〇』『タトバコンボ』がミッドチルダに降臨した

「!?!?!? 誰だか知らないが、片付けるッ!」

女性はオーズに向かって蹴りを放つ

「はっ!」

オーズはそれを簡単に受け止めた

「なに!?!」

オーズの胸に描かれた『虎の紋章』が輝く

すると、両腕の爪がしっかりとセツトされた

「はぁっ！！」

オーズは女性に向かってトラクローを振るう

女性は腕のビーム状のブレードでそれを受け止めた

「セイヤッ！」

オーズはそれにお構い無しでトラクローを振るって行く

「くっ！この程度で・・・ッ！！」

女性はトラクローを避けてブレードで斬りつけようとした

しかし、オーズは後ろに飛び、それをかわす

オーズの胸の『飛蝗の紋章』が輝き、足にパワーが満ちていく

「久しぶりの変身、身体は鈍ってないな！」

オーズはそのまま重力を無視したジャンプで女性を蹴りまくった

「くっ！IS発動！ライドインパルスッ！」

女性はISを発動し、高速移動をし始めた

そして、オーズをブレードで斬り付ける

「いだ、いだだ！？」

オーズはよろめき、後ろに吹き飛ばされた

「くっそ・・・油断したぁ・・・」

オーズはそう言って立ち上がる

「何やってんだ、映司！コアをコイツに変えろ！」

そう言ってアंकがオーズに2枚のメダルを投げる

「よし！」

オーズは攻撃を避け、メダルをキャッチする

『トラ・コア』と『バツタ・コア』を抜き取り『カマキリ・コア』と『チーター・コア』に変える

キーン、キーン、キイインッ！

そして、オースキャンで再び力をスキャンした

《TAKA!》《KAMAKIRI!》《CHEETAH!》

再び、円形の様々な色をした力の紋章がオーズの周りを踊る

そして、オーズの胸に紋章が刻まれ、力が宿る

腕の『虎の爪』が『螳螂の鎌』に変わり、脚の『飛蝗の脚』が『獵

豹の脚』に変わった

オーズはタトバコンボからタカキリーターに変わった

腕のパーツが起き上がり双剣『カマキリソード』になり、オーズはそれを構える

「行くぞー！ダッシュッ！！」

「なっ！？ぐあああ！！？」

女性はオーズのスピードに着いて行けず、身体に無数の切傷を付けられる

女性はオーズのスピードに驚愕していた

無理も無い、魔法も使わずに自分と同じかそれ以上で移動したのだ

「そろそろ決めさせてもらいますよ！」

オーズは一度女性から離れてカマキリソードを構える

「はあああ・・・セイヤアアア!!!!!」

そして、一瞬で女性の前まで移動し、思いっきり斬り付けた

「ぐっ・・・ああっ!!」

オーズが力を抑えた為、ブレードで防御出来たが女性は後ろに吹き飛ばされ、地面を転がった

「ま、まだだ・・・!」

女性はよろよろと立ち上がった

「まだやるのか?」

オーズはカマキリソードを構え直す

だがそこへ、眼鏡をかけた女性が現れた

「大丈夫ですかあ？トーレお姉さま」

「クアットロか、すまない・・・離脱するぞ」

「わかりましたあ」

「待てっ！」

オーズが迫るが、転送の魔法陣が既に敷かれていた

「この借りは、必ず返す」

そう言い残し、女性が消えた

オーズは逃げられた事を確認してから、変身を解除した

そして、アンクに頼んだクイントの元に走った

「アンク！その人大丈夫なのか！？」

「血を流し過ぎてる、このままじゃマズいなあ」

アंकはクイントを見て言う

「と、取り合えず病院に！」

「ああ、わかってる。だがちょっと待て」

アंकはそう言って立ち上がり、右腕を残して身体をバラバラにした

そして、クイントの身体に憑依した

「あ、アंक？」

クイントは目を開き、ムクツと立ち上がる

髪は金髪に変わり、目付きが悪くなっている

「これで死ぬ心配は無い。さっさと病院探すぞ」

クイントに憑依したアंकはそう言ってスタスタと歩いて行ってしまう

「お、おい！動いて大丈夫なのか！？おい！！」

映司は慌ててアंकの身体だったセルメダルを全て拾い、その辺に落ちていた袋に入れて、追い掛けた

↓時空管理局 本局 集中治療室↓

アंकがクイントの記憶を読み取り、調べた結果ここに運んだのだ
った

要するに、元いた場所の近くに帰って来たのだ

「君達がクイントをここまで運んで来てくれたのか。俺は『ゲンヤ・ナカジマ』だ。礼を言う、妻を助けてくれてありがとう」

クイントの夫のゲンヤが零次とアंकに礼を言う

「いや、俺達は通り掛かっただけなんで、気にしないで下さい。それより、クイントさんの容体はどうなんですか？」

映司は集中治療室の中のベッドで眠っているクイントを見てゲンヤに尋ねる

「かなり酷くやられていたみたいだ。出血も多かった。でも、一応、峠は越えたらしい。後は本人の体力しだいだそうだ」

ゲンヤも集中治療室の中で眠っているクイントを見て映司に説明した

「そうですか、よかったです」

映司は安心したように息を吐きながら言った

「お前さん達が助けてくれていなければ、クイントは確実に死んでいただろうな。本当にありがとう」

ゲンヤはもう一度映司とアंकに頭を下げた

「だから、そんな気にしないで下さい。俺達は自分達の出来る事を
しただけですから」

映司は笑いながらゲンヤに言った

「おい、映司。もう用は済んだだろ。行くぞ」

アंकは映司にそう言って歩き出す

「あ、おい！アंक！あの、じゃあ、俺達はこれで！お大事に！」

映司はゲンヤに早口でそう言つとアंकを追い掛けた

「・・・大した奴等だ。まだ小さいってのに・・・」

ゲンヤは去って行く2人を見てそう呟いた

深夜、映司とアंकは病院の入り口の前に立っていた

しばらくすると、2人の前に無数の機械の軍勢が現れた

「やっぱりなあ、思った通りだ」

アंकはそれを見てニヤリと笑って言う

「アंकの言う通り、口封じに来たのか」

そう言う映司の腰には既にドライバーが装着されている

「さっさと壊して来い、映司」

「うん」

映司はアंकにメダルを受け取り、ドライバーに入れる

そして、スキヤナーでメダルをスキャンした

「変身！」

キーン！キーン！キイイーンッ！

《TAKA!》《TORA!》《BATT!》

円形の様々な色の光が映司の周りを踊る

《TA・TO・BA!TATOB!TA・TO・BA!》

「はぁ！」

オーズに変身した映司はトラクローを装備して機械の軍勢に突っ込んだ

そして、次々と機械を破壊していく

しかし、機械は次々と湧いて来た

「数だけはいいな。映司！コレに変えろ！！」

そう言つてアंकは『クワガタ・コア』と『ウナギ・コア』をオーズに投げる

「ああ！よつと！」

オーズは目の前にいた機械をトラクロード破壊してメダルを受け取った

そして、『タカ・コア』と『トラ・コア』を抜いて、『クワガタ・コア』と『ウナギ・コア』に変える

そして、スキヤナーを滑らせた

キーン、キーン、キイインッ！

《KUWAGATA!》《UNAGI!》《BATAA!》

再び、円形の様々な色をした力の紋章がオーズの周りを踊る

そして、オーズの胸に紋章が刻まれ、力が宿る

頭の『鷹の目』が『鋏形の角』に変わり、腕の『虎の爪』が『電気鰻の鞭』に変わった

オーズはタトバコンボからガタウバに変わった

「はあっ!!」

オーズはクワガタヘッドから電撃を発し、ウナギアームの電気鞭で一気に機械を鉄屑に変えて行く

「クワガタとウナギって、こんなに相性よかったんだ!」

オーズは電気が増している事に気付き、次々と機械を壊してた

「はあっ!!」

オーズは今までより更に強力な電撃を発して機械全部に当てた

機械は爆発し、巻き込み合い、バラバラと機械の残骸が散乱した

オーズはメダルを抜き、変身を解除する

「ふう、楽勝！」

映司はアंकの方を見て笑顔でそう言った

「ふん・・・ッ！？映司！！」

「え？」

アंकは何かに気付いて映司の名を叫ぶ

映司の後ろに、さっきの攻撃から逃れた機械が1機残っていたのだ

しかし、その機械は黄色い竜巻に吹き飛ばされ、粉々になった

「油断し過ぎだよ？映司」

「まったく、ちょっと目を離すとこれだ」

「映司く！」

「久しぶりね、映司」

竜巻が来た方を見るとラト達4人がそこにいた

「みんな！どうしてここに？」

映司は4人を見て駆け寄り尋ねる

「メダルを使った気配があったから急いで来たんだよ。何があったの？」

ラトは近くにあった車のボンネットに座り、映司に尋ねる

「いや、さっき助けた人を狙ってロボットみたいなのが大量に沸いて来たんだ」

映司はこれまでの事を簡単に説明する

「また人助けしてたの？変わらないね」

ラトは笑いながら映司に言う

「うん、これが俺だからな」

映司は笑ってラトに返した

「アंक！お前が着いていながら何だこの醜態は！！」

「うるさい！アイツが勝手に油断しただけだ！！てか、お前醜態の意味わかってないだろ！！」

「う、うるさい！ちゃんとわかってるよ！」

アंकとコノハは再会早々に喧嘩を始めた

「まあまあまあ、2人とも落ち着けて！」

2人の間に映司が割って入る

「お前が原因だ!!」

そんな映司に2人は怒鳴った

「・・・ホント、変わらないわね」

「うん、おもしろい」

「変わらないのが映司の良い所なのかもね」

シャルとリクとラトは楽しそうに3人を見ていた

「で、これからどうする?」

喧嘩が沈静化し、これからどうするかの話し合いになっていた

「ん、取り合えず今日はどっかで野宿して、明日街を見て回ればいいんじゃない？」

映司は腕を組んで旅人的な考えを言う

『お前達に野宿してる暇なんてないぞ』

「」「」「え？」「」「」

「」「あ？」「」

聞き覚えの無い声に全員が周りを見回す

その次の瞬間、白黒のオーロラに吞まれ、周りが宇宙のような光景に変わった

「これは・・・」

「よお、初めましてだな。オーズ」

いきなりの事に呆然としていた6人の前に1人の男が現れた

首にマゼンタ色のトイカメラを首から掛けたその男は6人に歩み寄って来る

「あなたは・・・誰ですか・・・？」

映司はその男に尋ねる

「俺の名は『門矢士』。通りすがりの仮面ライダーだ」

そう言って士はマゼンタ色の戦士が描かれたカードを見せる

「その通りすがりの仮面ライダーが俺達に何の用だ？」

アंकは士にグリード化した腕を向けて言う

「お前等を戦いの舞台、『過去』に連れて行ってやろうと思ってな」

「過去？」

士がそう言つと周りの光景が動き、1つの星が近付いて来る

「お前等も知つてゐる通り、世界は無数に存在している。お前達の戦いの舞台は『まだ』あの時代のあの世界じゃない」

士はそう言いながら近付いて来た世界を見る

「この時代のこの世界のとある街に願いを叶える石『ジュエルシード』とかいう石が散らばつてゐる。それを集めろ」

士は何故か偉そうに命令口調で6人に言う

「おい、何でアイツはあんなに偉そうなんだ？」

アंकが怒りに震えながら映司に言う

「さ、さあ？俺様系の人なんじゃない？」

「おい、聞いてるのか？」

「あ、はい。聞いてます、ジュエルシードって言うのを集めるんで

すよね？」

士に聞いてるのかと問われ、映司は少し焦って答える

「でも、ジュエルシードってどんな物なんですか？」

「ああ、こんなのだ」

そう言って士は映司に青い宝石を投げた

「そいつを集めていれば、大体の事は何とかなる」

士は段々説明が面倒になってきたのか雑になり始める

「そうですか……。あつ、でも、あの世界で俺達が助けたクイントさんって人が狙われてるんです。今俺達が離れたら……」

「それは心配要らない。誰かがこの世界に残ればいい」

「……俺と映司で決定だ。お前等は留守番してろ」

アंकはラト達4人に言い放つ

「まあ、面倒事は嫌だし。映司が言ってた人を護ってる方が楽かもね」

「じゃあ、私も残る」

「俺も」

「私達に任せなさい」

4人は面倒事に巻き込まれなくなかったようですぐにそれに賛成した

多分、来いと言っても来なかっただろう

「話は決まったみたいだな。まあ、説明はこんな感じだ。大体わかっただろう？」

「はい、大体わかりました。とにかく、ジュエルシードを集めればいいですね？」

「ああ、そうだ」

「メダル集めと変わんないな」

映司は笑いながらアंकに言う

「確かにそうだなあ」

映司の言葉にアंकは同意して言う

「でも、オーズが必要だって事は、その事件にメダルが関係してるんですか？」

「話が早くて助かる。そうだ、ジュエルシードと一緒にセルメダルもばら撒かれてる」

「じゃあ、俺達はセルメダルをばら撒いた奴を見つけ出せばいいんですよね？」

「ああ、そういう事だ」

映司の考えを士は肯定した

「じゃあ、行つて来い」

士がそう言つと映司とアंकはさっきのオーロラに包まれ消えた

「映司も物好きだなあ、関係ない赤の他人の為に戦えるなんて」

「アंकも変わったよ。昔は絶対に「何の得がある？」とか言い出す奴だったのに」

「まあ、映司と一緒にいれば嫌でも変わるんじゃない？影響力高いから」

「えいきょうりよく・・・？」

「なるほどね、アंकも映司に感化された訳だ」

「映司パワー・・・もしくは映司オーラかな？」

「ネーミングセンス皆無だね、コノハ」

映司とアंकがいなくなった事を良い事に、4人は好き勝手言い始める

「だからこそ、アイツは仮面ライダーと呼ばれるに相応しい奴なんだ」

4人の話を聞いて、士は小さく呟いた

「何か言った？」

「いや、何でもない。お前等もさっさと元いた世界に帰れ」

士がそう言つと、ラト、コノハ、リク、シャルもオーロラに包まれて消えた

「・・・頼んだぞ、仮面ライダーOOO」

士は映司達が向かった世界を見て呟いた後、空間と一緒に消えた

こうして、800年の眠りから目覚めた映司とアークは新たな戦いに身を投じるのだった

第1話『目覚めとオーズと旅立ち』（後書き）

C o u n t T h e M e d a l s !

現在、オーズが使用したメダルは？

『タカメダル』× 3

『トラメダル』× 1

『チーターメダル』× 1

『クワガタメダル』× 1

『カマキリメダル』× 1

『バッタメダル』× 1

『ウナギメダル』× 1

第2話『出逢いとジュエルシードとヤミー』（前書き）

C o u n t T h e M e d a l s !

現在、オーズが使用したメダルは？

『タカメダル』× 3

『トラメダル』× 1

『チーターメダル』× 1

『クワガタメダル』× 1

『カマキリメダル』× 1

『バッタメダル』× 1

『ウナギメダル』× 1

第2話『出逢いとジュエルシードとヤミー』

魔法少女リリカルなのは

～仮面の戦士～

前回の3つの出来事――

1つ、オーズである火野映司とグリードが800年の眠りから目覚める

2つ、手負いの魔導師、クイントを救う為、映司はオーズに変身する

そして3つ、通りすがりの仮面ライダー、門矢士に導かれ映司とア
ンクは旅立った

第2話『出逢いとジュエルシードとヤミー』

「夜の海鳴市」

オーロラから出た映司とアंकはその街の一番高いビルの屋上にいた

「ここが戦いの舞台か……。平和そうな世界だけどなあ」

映司は街を見下ろして言う

「上目だけ見れば、確かに平和だ。だが、確かに感じるな」

「感じるって……。セルメダルか？」

「ああ。だが、他にもおかしな力をいくつか感じる。奴が言ってた
ジュエルシードとか言う石かなあ」

アंकはセルメダル以外にもおかしな力の気配を感じていた

「ところで、映司。お前、何持ってた？」

アंकが映司の手にあったアタッシユケースを指して言う

「え？あ、コレ？さっきなんか渡されたんだけど・・・」

映司はアタッシユケースを地面に置いて、開けてみた

「これ、お金かな？あと、本と・・・何だコレ？」

中身は札束とタウン誌と最新型のスマートフォン2台だった

「コレはこの世界の通貨だ。映司、それ貸してみろ」

「え？これ？はい」

映司はアंकに言われた通り、スマホを渡した

「ふん、なるほどな。これで離れた場所においても連絡が取れるらしいぞ」

「へえ！こんな小さな物で連絡が取れるんだあ」

映司はスマホを見て感心した様に言う

「でも、良く知ってるな、お前」

「あの女に憑依した時に記憶の中の知識を読み取らせてもらった」

「・・・抜かりないな、お前」

抜け目の無いアंकに映司は感心するのだった

「ジュエルシードかぁ・・・。見た目は普通の宝石にしか見えないんだけどなぁ・・・。」

映司は土から貰ったジュエルシードをポケットから出して見つめながら言う

「願いを叶えてくれる石か。アंकなら何をお願いする?。」

「アイス1年分だな」

「・・・」

「・・・何だ？」

「いや、別に。食いすぎて腹壊すなよ？」

映司はそう言っア Ank から ジュエルシードに視線を戻す

「こんな小さな物をこんな広い街から探し出せるのかな？」

メダルならグリッドと戦えば手に入れる事が出来た

しかし、ジュエルシードは違うと考え、映司は少し大変そうだった
思った

「いくつか固まってる物もある、他にも集めてる奴等がいるみたい
だなあ」

「俺達以外にもジュエルシードを集めている人達がいるのか・・・」

映司はメダルの要領で一度上に投げて掴み、握り締める

「まあ、何とかなるでしょ」

「・・・お前のそのポジティブな考えは何処から来るのか教えて欲しいな」

アंकは映司にの発言に呆れながら言った

「これまでも何とかなって来たし、大丈夫だって」

映司はアंकの背中を叩いて言った

「・・・じゃあ、それを見せてみる」

「え？」

「来たぞ、正面だ」

「え？正面？」

映司が正面を向くと数メートル先に黒いマントを靡かせた金髪の少女が降りて来た

その少女は映司達がその世界に現れるところを見ていた

「あの人達・・・何者だろう・・・」

映司達が転移魔法も使わずにこの世界に現れたのを見て少女は不振に思い、警戒していた

少女は魔力反応も出さずに転移する事が出来るなんて、聞いた事になかったのだ

少女は話している映司とアंकを見つめていた

そして、映司がポケットからジュエルシードを出したのを見た

「あれは・・・ッ！」

それは、少女が必死になって探している物だった

「『フェイト』！」

フェイトと呼ばれた少女はその声に振り返る

「『アルフ』、ジュエルシードを見つけたよ」

そこにいたのは、自分の使い魔のアルフだった

「うん、あたしもジュエルシードの反応を見つけたから急いで来たんだよ。で、何処にあるんだい？」

アルフはジュエルシードが何処にあるのかフェイトに尋ねた

「あの人達が持つてる」

そう言ってフェイトはビルの屋上に立っている映司とアंकを指差した

「アルフ」

「あいよ！」

フェイトは自分のデバイス『バルディツシュ』を握り締める

アルフはフェイトの横で指をパキポキ鳴らした

2人は屋上にいる映司達からジュエルシードを奪う為に零次達の前に降り立った

フェイトとアルフは映司とアंकの前に立ち塞がった

フェイトは映司を一瞥する

身長は自分よりも少し高く、顔立ちも端正な部類に入り、優しそうな雰囲気をする人だと感じた

（いろいろと聞きたいことはあるけど・・・）

フェイトはバルディッシュをサイズフォームに変形させる

フェイトの隣にいるアルフも拳を作って構えを取った

映司は状況を呑みこめていないような表情をしている

しかし、アंकはフェイト達をバツチり睨んでいた

（ごめんなさい）

フェイトは心の中で映司とアंकに謝罪した

自分達がこれから行うことは完全に強盗だという事をフェイトはわかっていた

映司とアंकを気絶させてジュエルシードを奪つと言つたのだから、それ以外に言いようはない

「ごめんなさい・・・」

フェイトは小さな声だが、映司に謝罪の言葉を告げる

そして、そのままバルディッシュを構え、映司に向かって駆け出した

「ごめんなさい・・・」

目の前にいるフェイトの小さな呟きは映司に届いていた

「えっ？」

映司は聞き返そうとしたが、返って来たのは金色の鎌による攻撃だった

「馬鹿映司！避ける！」

「おわっ！？」

アंकは映司の首根っこを掴んで後ろに飛んだ

映司が立っていた地点のコンクリートには大きな亀裂が走っている

「ちょ、何で攻撃してくるんだ！？あの子！？」

「俺が知るか！！さっさと変身しろ！！」

そう言ってアंकは4枚のメダルを映司に渡す

「わ、わかった」

映司は着地して腰にドライバーを装着する

フェイトは体勢を立て直し、バルディッシュを構え直して、映司に向かって走り出す

そして、映司の首元を狙ってバルディッシュを振るった

映司はそれを避けてドライバーにメダルを入れて行く

「君、誰か知らないけど、いきなり襲って来るのはおかしいんじゃない？」

映司はメダルを3枚共入れ終え、フェイトに言う

「あなたが持っているジュエルシードを渡して下さい」

フェイトは映司の目を真っ直ぐに見て言い放つ

「・・・」

「アンタさあ、さっさと渡してくれないかい？痛い思いしたくないだろう？」

後ろからの声に振り向くと、アルフが腕を組んで立っていた

「・・・悪いけど、渡せない」

映司はポケットに入っているジュエルシードに手を当てて言った

いきなり攻撃して来る人物にこれを渡そうとは思えなかったのだ

「・・・アルフ」

「あいよ、フェイト」

フェイトはアルフに戦闘に参加するようアイコンタクトをする

それを見て、映司はオースキャナーを手にした

「映司、さっさと変身してこの女共片付けろ。俺が獣女の相手をしてやる」

アंकが映司の後ろに降り立ち言う

「ああ、わかった。変身！」

キン！キン！キイインッ！

《TAKA!》《TORA!》《BATT!》

円形の様々な色の光が映司の周りを踊る

《TA・TO・BA!TATOB!TA・TO・BA!》

不思議な歌が流れ、映司はオーズ・タトバコンボに変身した

「何だい？タカトラバツタって、ふざけてるのかい？」

アルフがオーズの変身音にツツコミを入れた

「歌は気にするな。ふざけてるかは・・・戦ってみればわかる」

そう言うとアंकは右腕をグリード化し、赤が強い虹色の翼を広げた

そして、アルフに火炎弾を放ち空に飛び上がった

「くっ！待て！！」

アルフはアंकを追って空に飛び上がる

しかし、アルフはアंकのテリトリーに誘い込まれた事を知らなかった

「おい、アंक！！手加減しろよ！？」

「わかってる！！」

空を飛んでいるアंकに向かってオーズは大きな声で言う

「さて、俺達も始めようか」

オーズはフェイトの方を見て言った

それを合図にフェイトは動き、オーズに向かってバルディッシュを振るった

「はあっ！」

オーズはそれをトラクロードで受け止め、フェイトの腹部を手の平で突いた

「ぐっ!？」

フェイトは腹部に衝撃を受けて後ろに吹き飛ばされた

フェイトは後ろに飛ばされ、膝を着く

そして、映司を変身させた事を後悔した

変身する前と変身してからの戦闘力が全然違う

映司が変身と言つまでに攻撃する隙はいくらでもあった

しかし、自分は映司の変身を許してしまった

フェイトは自分の浅はかさに酷く後悔した

「やめた方がいいよ。これ以上すると君が怪我する」

「・・・それは、出来ません」

フェイトはバルディッシュを構えてオーズに向かって走る

「頑固だなあ」

オーズもフェイトに向かって走り出す

そして、バルディッシュとトラクローがぶつかり合った

いつもなら片手で受け止め片手のクローで切り裂く事が出来るが、
相手は女の子だ

怪我でもさせたら一生後悔する事になる

オーズはバルディッシュのロッド部分を蹴り、フェイトを吹き飛ばす

「ぐっ」

「ん？」

しかし、蹴りを入れたオーズは手応えが無かった

フェイトはオーズの蹴りが当たる直前で後ろに飛んでいた

「バルディッシュ！」

「Arc Saber」

バルディッシュがそう電子音で言い放つと、フェイトはバルディッシュをフルスイングした

三日月形の刃がくるくると回転しながらオーズを狙って、向かって来る

「！！！」

《TAKA!》《KAMAKIRI!》《BATA!》

そして、直撃した

オーズがいた場所を中心に爆煙が起こる

「やった？」

「いや、まだだよ」

爆煙を掻き分けながらオーズが出て来た

先ほどまでとは違い、黄色かった部分が緑になり、2本の剣を逆手持ちにして立っていた

オーズはタトバコンボからタカキリバに変わっていたのだ

そして、オーズは全くの無傷だった

「そ、そんな。確実に捕らえてたはずなのに・・・」

「うん、確かにね。でも、本体に当たらなきゃ意味無いよ」

確かにアークセイバーは直撃コースでオーズを捉えていた

しかし、直撃寸前で『トラ・コア』を『カマキリ・コア』にチェンジしたのだ

「もう終わりにしよ。ね？」

「・・・ダメ」

フェイトはオーズの言葉に耳を貸さず、バルディッシュを構えた

「・・・」

オーズは困った様に溜息をついた

「おい、映司！いつまでやってる！」

そこに、アルフと戦っていたはずのアंकが戻って来た

「あ、アルフ!？」

アंकを見て、フェイトは動揺し声を荒げた

それは、アंकが気絶したアルフを抱えていたからだった

「お、おい、アंक!手加減しろって言っただろ!!怪我してるじゃないか!!」

オーズはアंकに掴み掛かり頭を何度も殴って言った

フェイトよりオーズの方が動揺していた

「離せ!おう、お前!!今、俺の事何発殴ってんだよ!!ああ!？」

オーズの手を振り解き、今度はアंकがオーズに掴み掛かり殴り掛かった

「お前こそ!!その子に何したんだよ!？ああ!？」

とうとう2人で喧嘩を始めてしまった

「殴り掛かって来たからちよつと焼いてやったただけだろうが!!」

「何で焼くんだよ!!もつと他にやり方あっただろ!!」

「・・・あ、あの・・・」

フェイトはそれを見て、もう訳がわからなくなってしまった

「ほんつつと、ごめん!友達の子に怪我させちゃって!!」

映司はフェイトにアंक（無理矢理）と共に頭を下げていた

フェイトは戦いの疲れからか、壁を背に座っている

「おい、先に襲い掛かって来たのはコイツ等だぞ」

「いいから！女の子に怪我させたんだぞ！！問答無用で男は謝らないといけないんだよ！！しかも火傷だぞ！！痕が残ったらどうするんだよ！？」

「コイツ等の自業自得だろう」

「黙れ！この鳥野郎！！」

映司はアंकにそう言ってもう一度フェイトに頭を下げさせた

「あ、あの、もう、いいですから……。その人の言う通り、先に攻撃したのは私達ですから……」

謝り続ける映司にフェイトは少し困惑しながら言う

「アルフも少し経てば目を覚ますと思います。だから、大丈夫です」

「そっか、よかったあ……」

映司は本当に安心したようにアルフを見て言った

「あ、あの、お名前を聞いてもいいですか？」

フェイトは映司とアンの顔を見上げるようにして尋ねた

「え？あ、そういえば名乗ってなかったね。俺は火野映司。こっちはアング、君は？」

映司はフェイトの前に膝を付いて座り、手を差し出した

フェイトは少し迷ったが映司の笑顔を見て答える事にした

「フェイト、フェイト・テストロッサです。こっちは使い魔のアルフ」

映司の手を握り、フェイトも名前を名乗った

「アルフちゃん、大丈夫かなあ・・・」

映司はまだアルフを心配そうに見つめている

「ふん、お人好しが・・・」

アंकは立ち上がってビルの縁に座って夜の街を見に行った

「・・・」

フェイトはアルフを心配している映司を見つめて言おうか迷っていた

しかし、自分達の目的を忘れる訳にはいかないと考え、勇気を出して映司に言う事にした

「あ、あの・・・」

「え？なに？」

「そ、その・・・ジュエルシードを私に・・・その・・・」

フェイトはしどろもどろになりながらも映司に何とか言おうとする

「・・・フェイトちゃん、1回深呼吸してみようか？」

「あ、は、はい・・・すう・・・はあ・・・」

「はい。じゃあ、もう1回聞くよ？なに？フェイトちゃん」

映司は笑ってフェイトに尋ねた

「あ、あなたの持っている、ジュエルシードを私に下さい！」

フェイトは今自分が持っている勇気を振り絞って映司に言った

「この事だね。何でフェイトちゃんはコレが欲しいの？」

映司は土から渡されたジュエルシードをポケットから取り出してフェイトに見せた

「か、母さんがジュエルシードを欲しがってるの・・・」

「お母さんが？何で？」

「・・・そこまでは教えてもらってない・・・」

フェイトは俯いて応えた

「そっか、はい」

映司はフェイトにジュエルシードを差し出す

「え？」

フェイトはそんな映司の態度に怪訝な表情を浮かべる

「あ、あの、もしかして・・・」

「必要なんでしょう？ほら、俺達は別に要らないし、叶えたい願いも無い。集めろって知らない人から言われて集めようかなって考えてただけだから。お母さんと知らない人、どっちを優先させるべきかはすぐわかるよ」

映司はそう言ってジュエルシードをフェイトに握らせる

「あの、本当にいいの？」

「あ、2つだけ約束して欲しいんだけど、いい？」

「な、なに・・・？」

フェイトは何を言われるのかと少しビクビクしながら映司に言う

「この石を絶対悪用しない事、それと石の取り扱いに注意する事、怪我したら大変だからね。守れる？」

「え？そ、それだけ？」

「うん、それだけ」

「ほ、ホントに？その・・・他に要求したりは・・・」

「しないよ。アंकじゃあるまいし」

映司は笑いながらフェイトに言う

「おい、どういう意味だ？」

「うわぁ！？あ、アंक！？いつからいたんだ！？」

「さっきからだ！何がアंकじゃあるまいしだ！！」

アंकは映司の頭を引っ叩き言った

「あの・・・」

「何だ！！」

「あ、あ、あの・・・、その・・・」

アंकに怒鳴られ、フェイトは少し怯える

「止めるよ、アंक！怖がつてるだろ！ごめんね、なに？フェイトちゃん」

映司は凄んでいるアंकに抑えるように言う

「あ、えと、その・・・、ありがとう」

フェイトは映司に頭を下げると、バルディッシュの水晶部分にジュエルシードを取り込んだ

「う、うん・・・。フェイトお・・・無事かい・・・？」

気を失っていたアルフが目を覚まし、火傷を負った箇所を押さえながらフェイトがいる所まで歩み寄る

「アルフ、大丈夫？」

「う、うん。まだちょっと痛いけど大丈夫だよ。それより、ジュエルシードは奪えたのかい？」

アルフの問いにフェイトは首を横に振る

「ううん」

それが合図となったのかアルフはこちらに歩み寄ろうとしている映

司とアंकを睨みつけた

「ア、アルフ。ダメだよ。奪えなかったけど、渡してくれたから」

そう言いながらフェイトは映司から受け取ったジュエルシードをアルフに見せる

「え？そ、そうなのかい？」

「うん。だから、もう戦う必要は無いよ」

「そ、そっか、フェイトがそう言うなら・・・」

アルフはそう言つと警戒を解いた

「・・・おい」

「な、何だい？まだやろうつてのかい？」

アंकに声を掛けられたアルフは拳を握り構える

「いや・・・、悪かったな。大丈夫か？」

「えっ？」

「ええっ!？」

そのアंकの発言にアルフが少し戸惑い、映司が驚愕した

「お、おい、アंक？熱でもあるんじゃないか？大丈夫か？」

映司はアंकのおでこに手を当てて言う

「・・・熱は無いみたいだな。じゃあ、明日はパンツの雨でも降るのかな？」

映司は空を見上げて不安そうに言う

「俺はもう2度と謝らない」

映司の言葉にアंकは固く誓ったのだった

「さうて・・・どうしようか・・・」

映司は伸びをして夜景を見ながら呟いた

「あの、どうしたの？」

「俺達さっきこの世界に来たから今日泊まる所無いからどうしようかと思って。やっぱり野宿かなあ」

お金も街の地理もわからない映司とアंकにはもう野宿という選択肢しかなかったのだ

「アंक、野宿でもいいか？」

「いつもの事だろ。今更聞くな」

「だよな。それじゃ、フェイトちゃん。ジュエルシードは俺達も集めないといけないからまた会うと思う。またね！」

そう言つて映司とアंकは取り合えず野宿出来る場所を探す為にビルから降りる事にし、歩き出した

「あ、あの！」

そんな2人をフェイトは呼び止めた

「なに？まだ何かあった？」

映司は振り返り、フェイトに尋ねる

「あの、もし、2人が良かったら私達の家泊まりませんか？」

映司にはフェイトが天使に見えた

「・・・アंक、天使がいるぞ」

「映司、しっかりしろ。フェイトは人間だ」

おかしな事を言い出した映司にアंकは頭を叩いて言った

「あ！でも、フェイトちゃんのご両親は許してくれるの？」

映司はハツと思い付き、フェイトに尋ねる

「私とアルフしか住んでないから大丈夫だよ。アルフもいいよね？」

「フェイトがいいなら、私はいいよ」

アルフは軽い感じで2人が泊まる事を承諾する

「うーん・・・」

「映司、どうするかさっさと決めろ」

アंकは映司が渋っているのを見てイライラし始める

「他にアテがあるの？それとも私達の家はイヤ？」

フェイトが上目でどこか悲しい表情で映司を見つめる

（あれ？何もして無いのに何だろう？この罪悪感・・・）

映司は何故か自分がやましいことをしたのでは、と思ってしまっ

「フェイトとあたしがいいって言ってんだからさ。ありがたく受けなよ」

アルフが映司に覚悟を決めるように促す

映司はフェイトとアルフを見る

「・・・じゃ、じゃあ、お言葉に甘えて、お世話になります」

映司は2人に軽く頭を下げた

「フェイトちゃん、さっきの服って戦闘服みたいな物なの？」

映司はフェイトの家に向かっていている間にフェイトに尋ねていた

「え？」

「いや、さっきと服装が違うから、どうなの？」

「バリアジャケットって言うんだけど・・・知らないよね」

フェイトは困った様な笑みを浮かべて言った

「うん、知らない。アंकは？」

「知ってる訳無いだろう」

アंकは聞くなという空気をかもし出して言った

その後、数分歩くとフェイトの家が見えて来た

「おお！凄い！ここがフェイトちゃんの家なの？」

映司はフェイト達が住んでいる高級マンションを見上げて声を上げた

そして、マンションに入って行く2人に零次とアंकも続く

そして、エレベーターに乗って上に上がる

（・・・耳と尻尾は消せるんだな）

アंकがアルフの耳と尻尾が消えているのを見て、自分の右腕も似たような物かと思った

エレベーターを出て少し歩いて部屋の前に到着し、鍵を開けて部屋の中に入った

高級マンションだけあって部屋の中は広く、ガラス張りの壁から綺麗な夜景が見える

フェイトとアルフはソファーに座る

「こんな凄い所に住んでるなんて、羨ましいなあ」

映司とアंकもソファに座った

映司はちゃんと座っているがアंकはソファに身体を倒し寝転がっている

「ところで、フェイトちゃんとアルフちゃんは何者なの？あの鎌みたいなのも凄かったし、バリアジャケットだっけ？あれも凄かったよ」

映司はずっと疑問に思っていたことを2人に尋ねる

「ああ、そうだ。お前達、一体何者だ？」

アंकも映司に便乗して2人に尋ねた

「私は『魔導師』なんだ。それで、アルフは私の使い魔だよ」

フェイトは2人の質問に答えた

「魔導師と使い魔か……。聞いたこと無いな」

映司は腕を組んで記憶の中を探すが覚えが無かった

「騎士なら知ってるがなあ。お前達が使っている魔法も俺達が知っている魔法とは違う様だなあ」

自分達が知っている魔法の魔法陣は、円形の中で正方形が回転する物ではなく三角形の中で剣十字の紋章が回転している物だった

「……時の流れだな」

アंकは隣にいる映司にしか聞こえないくらいの小さな声で呟いた

「……使い魔ってどういうものなの？」

映司は気を取り直してフェイトに尋ねる

「使い魔は魔導師が使役する一種の人造生物です」

「人造生物？」

「元々は普通の狼だったんだけど、ちょっと死病に掛かっちゃって・
・。群から追放されて死に掛けていたところをフェイトに拾われ
たんだよ。それで、フェイトがあたしと仮契約して、命を助けてく
れたんだ」

アルフは幸せな出来事を思い出すように目を細め、優しい表情で零
次に言った

「そうなんだ。フェイトちゃんは凄い魔導師なんだね」

映司は少し感動したようで目を潤ませながらフェイトに言った

「そ、そんな事ないよ。アルフもちよつと褒めすぎだよ？」

映司の言葉にフェイトは顔を赤くしながらアルフに言う

言われたアルフはニコニコ笑いながら尻尾を振ってる

フェイトが褒められて嬉しかったようだ

「あ、あの、今度はこっちから聞いてもいいですか？」

フエイトは遠慮がちに映司とアंकに言う

「うん、良いよ。何でも聞いて、アंकが答えてくれるから」

「俺か!？」

映司の発言にアंकはビックリした

「じゃ、じゃあ、映司とアंकは何者なの？」

「そうそう。映司は変身するし、アंकは背中から翼が生えるし。しかも、2人とも滅茶苦茶強いし。一体何者なんだい？それと、あのタカトラバツタつてのも気になる！」

「・・・コイツはオーズ、俺はグリードだ。後、歌は気にするな」

アंकは凄い雑に自分達の正体を明かした

「オーズとグリードってなに？」

フェイトは聞いた事がない単語に首を傾げる

アंकは更に詳しく説明する為に、コアメダルを出し、映司にドライバーを出させた

「この、オーズドライバーに3枚のコアメダルを装填し変身するのがオーズだ」

「このメダルで変身するの？」

フェイトとアルフはコアメダルを手にとって見る

「そうだ。コアメダルは世界の様々な生物の力を蒐集、凝縮して造られたメダルだ」

「へえ、凄いんだね」

アルフはコアメダルをまじまじと見て言う

「じゃあ、グリードは？」

「自律意思を持つまでに進化したメダルを肉体として構成し、1個の生命体として誕生した存在だ」

「じゃあ、アंकの元はメダルなのかい？」

「ああ。だが、今は違う。メダルの塊だったのは映司と逢うまでの話だ」

アंकは昔の嫌な事を思い出し、すぐに思考を止める

「まあ、こんなところだな」

アंकはメダルを身体に戻し、映司もドライバーを仕舞った

「映司とアंकって凄いんだね」

フェイトは映司とアंकを見つめてそう言った

食事をご馳走になり、映司は片づけをしていた

因みに、インスタントばかりが出て来た為、映司が100円スーパーまで行き、食材を買って来て料理した

映司の料理はおいしく、フェイトとアルフには好評だった

しかし、鶏肉を使っていた為、アンクとは喧嘩になった

今、映司は食器を洗っている

フェイトに止められたが、泊めて貰ったお礼だと言って止めなかった

赤いシルクのような布を敷いたソファーに寝転がってアイスを食べている

因みにアイスは映司がついでに買って来た物だ

「フェイト〜！シャワー浴びるけど一緒に入るかい？」

バスルームからアルフのフェイトを呼ぶ声が聞こえた

既にバスルームに入っているらしく、一緒に入ろうとフェイトを誘ったようだ

「あ、うん、わかった！今行くよ、アルフ！」

そう言ってフェイトもバスルームに向かおうとした

しかし、途中で映司とアंकの方に振り返った

「映司、アंक」

「なに？フェイトちゃん」

「ああ？」

映司は食器を洗う手を止めてアंकは背凭れの向こうから少し顔を

出してフェイトを見る

「2人はそんな事する人じゃないと思うけど・・・」

フェイトが何を言おうとしているのか映司には理解できた

「わかってる、覗かないよ。早く行っておいで、アルフちゃんが待ってるよ」

「ガキの身体に興味なんかあるか。さっさと行け」

そう言って映司は洗い物を再開し、アंकは姿勢を戻した

「・・・うん」

フェイトは2人の返答を聞いた後、少し不満に思いながら、パジャマを持ってバスルームに向かった

「最近の子は進んでるんだな」

映司はフェイトの言動を見聞きし、笑いながら言い、洗い物を続ける

「背伸びしてるただのガキだ」

アंकは鼻で笑うとまたアイスを食べ始める

「まあ、今の俺達も子供だけだな」

「・・・」

珍しく映司に言い返せないアंकだった

海鳴市のある廃墟

「お、お前！何なんだよ！？」

一般的に不良と呼ばれる類の青年が突然現れ、仲間を痛めつけた黒いローブを着た男に怯えながら言う

「・・・その欲望、解放しろ」

男はそう言つとセルメダルを取り出して青年に投げた

青年の額にスロットが現れ、メダルが入る

すると、青年の腹の辺りからミイラ男のような怪物が現れた

「ひいゝ！？な、何なんだよゝ！？」

青年は腰を抜かし逃げる事も出来ずにミイラ男をただ見つめていた

「これはお前の欲望だ」

男はミイラ男の横に立ち、青年に言う

「お前には、これもやろつ」

そう言つてミイラ男に青い宝石を投げ付けた

宝石はミイラ男の体内に吸収され、力を流し込んだ

「お前の『願い（よくぼう）』、利用させてもらっぞ」

男は青年にそう言つとミイラ男を連れて消えた

この世界に、初めてヤミーが誕生した瞬間だった

第2話『出逢いとジュエルシードとヤミー』（後書き）

C o u n t T h e M e d a l s !

現在、オーズが使用したメダルは？

『タカメダル』× 3

『トラメダル』× 1

『チーターメダル』× 1

『クワガタメダル』× 1

『カマキリメダル』× 1

『バッタメダル』× 1

『ウナギメダル』× 1

第3話『温泉ともう1人と理由』（前書き）

C o u n t T h e M e d a l s !

現在、オーズが使用したメダルは？

『タカメダル』×3

『トラメダル』×1

『チーターメダル』×1

『クワガタメダル』×1

『カマキリメダル』×1

『バッタメダル』×1

『ウナギメダル』×1

第3話『温泉ともう1人と理由』

魔法少女リリカルなのは

～仮面の戦士～

前回の3つの出来事――

1つ、門矢士に導かれ、映司とアंकはとある世界の過去にやって来た

2つ、ジュエルシードを求めるフェイトとアルフに出逢い、戦う

そして3つ、行くあてが無かった映司とアंकはフェイトの家に泊まった

第3話『温泉ともう1人と理由』

フェイトが住む高級マンションの屋上

そこに、朝っぱらからアイスを食べているアンの姿があった

チャリンチャリンチャリン

「・・・セルメダル、随分速い速度で溜まってるな」

アンはセルメダルが大量に生まれている気配を感じていた

「だが、場所がわからないだ？何だ、この鬱陶しい気配は・・・」

しかし、何故かヤミーの居所がわからなかった

「チツ、厄介な世界に来たもんだなあ」

アンはアイスを食べ終わると、フェイトの家に戻って行った

くフェイトの家く

映司は早起きして朝食を作っていた

「まさか、自炊がこんなところで役に立つなんてなあ、よつと！」

映司はホットケーキをうまく引つ繰り返してちよつと嬉しくなった

（何だろう？何かいい匂いがする）

先程まで熟睡していたフェイトは鼻腔をくすぐられ目を覚ました

眼をこすり、ベッドのそばで眠っている狼を揺する

「アルフ、アルフ。朝だよ」

「うん」

狼は起き上がって、伸びをする

狼は起き上がると、少女の姿・アルフに変わった

「おはよう、フェイト。あれ？何かいい匂いがするねえ、何だい？」

「多分、映司だと思う」

「映司が？」

「うん。昨日も晩御飯作ってくれたでしょ？きっと今朝も作ってくれたんだよ」

フェイトはそう言ってパジャマから私服に着替えてリビングに向かった

2人がリビングについていた頃には映司がテーブルに4人分の朝食を置いていた

「おはよう。フェイトちゃん、アルフちゃん」

「おはよう、映司。今朝も作ってくれたの？」

「うん。泊めて貰ったお礼だよ。ほら、座って？アंकもそろそろ戻って来ると思っから」

映司はそう言ってキッチンに残りの朝食を取りに行った

「あんなに気を使わなくてもいいのに・・・」

フェイトは少し申し訳なさそうに言い、席に座る

「まあ、おいしい物が食べれるからいいけどね！」

アルフもフェイトの横に座り、ホットケーキを見て涎を拭っている

そんな事していると、ベランダからアंकがやって来た

「あ、アंक。おはよう」

「おはようー！」

フェイトとアルフはアंकに挨拶をするが・・・

「ああ、お前等か。朝っぱらから元気だな」

挨拶を返さず、アルフの向かいに座った

「おお、アंक。帰って来たのか」

映司がアंकと自分の分のホットケーキを持って来てテーブルに並べる

「よし！じゃあ、食べよっか」

「「「いただきます！」」」

「・・・い・た・だ・き・ま・す」

アंकは何故か変な言い方である

「アंक全然慣れないよな。挨拶とか」

「俺は必要な事しか覚えないんだ」

アंकは頼杖をついてホットケーキにハチミツを掛け、頼張りながら言った

「あ、2人共何掛ける？バターにマーガリン、ハチミツにクリーム、ジャムもあるよ？」

「じゃあ・・・バターとハチミツで」

「あたしはバターとクリームを貰おうかな」

「わかった。はい」

映司は2人に言われた物をそれぞれ渡す

2人はそれを掛けてホットケーキを頼張った

「あ、おいしい・・・」

「うん！おいしいよ！映司！」

映司のホットケーキはフェイトとアルフには好評だった

「口に合ってよかった。アルフちゃん、まだおかわりあるからね」

「うん！」

ガツガツとホットケーキを食らうアルフに映司は笑いながら言った

「おい、映司。おかわりだ」

「はやっ、ちょっと待ってるよ」

映司はアंकから皿を受け取り、キッチンに向かった

「・・・アंकはずっとこんなおいしい物食べてたの？」

「まあ、アイツとは長い付き合いだからな。最初は不味くて食えたもんじゃなかったがなあ」

フェイトに尋ねられ、アंकはメンド臭そうに答える

「良いね、ドックフードよりおいしいよ」

「・・・犬かお前は」

「あたしは狼だ!!」

アंकの呟きにアルフは身体を乗り出して言った

「あ、アルフ？落ち着いて？」

「あれ？何喧嘩してるの？」

フェイトがオロオロしていると、ホットケーキを持った映司が戻って来た

「映司！アंकが酷いんだよ!!」

「え？どういこと？」

「あたしは狼なのに、アंकが犬だって言っただ！！」

アルフは映司に泣き付いた

「お前がドックフード食ってるからだろうが！！」

「まあまあ、アंकもアルフちゃんも落ち着いて。アंक、アルフちゃんは狼らしいから気をつけるよ。アルフちゃんもドックフードなんて食べてるから勘違いされるんだよ？」

「う、ううゝ・・・」

映司の言う事も尤もな事なのでアルフは反論できなかった

「ほらコレ、おかわり。コレ食べて機嫌直して？」

映司はアルフとアंकにおかわりのホットケーキを渡して言った

「・・・映司がそう言うなら・・・しょうがないね」

アルフは大人しく座ってホットケーキを食べ始める

「・・・映司って、凄いね」

フェイトは映司がアルフとアंकの喧嘩を瞬時に終わらせてしまったのを見て呟くのだった

朝食を食べ終わると、映司は洗い物を始めた

フェイトも手伝おうとしたがそれは映司に遮られた

「洗い物は俺がやるから、フェイトちゃんは寛いでいいよ」

映司は言い出すと聞かないと昨日わかったのでフェイトは潔く引き下がりリビングで寛いでいた

アंकとアルフは当然のようにソファーで思いっきりふんぞり返っていた

洗い物を終えた映司は3人と同じ様にソファに座った

「ねえ、フェイトちゃん。ジュエルシードっていくつ集まってるの？」

「え？えつと・・・映司に貰ったのも合わせると2つだよ。まだ始めたばかりだから全然集まってないんだ・・・」

「そんな事ないよ、もう2つも集まってるんだ。凄いね」

「そ、そうかな？あはは・・・」

映司の言葉に少し照れた様にフェイトは言った

「あ、そうだ。明日、あたしがジュエルシードを見つけた所に行くんだけど、映司達も来るかい？」

「え？」

アルフの発言に映司は首を傾げた

「ちょ、ちよつとアルフ！映司達にも都合が――」

「行くよ？俺達もジュエルシードを集めないとダメだから」

「ええ！？」

映司の発言にフェイトは凄じ驚いた

「で？場所は？」

「海鳴温泉だよ！」

「「海鳴温泉？」」

地名を知らない映司とアंकはリピートするのだった

「その近くにジュエルシードがあるの？」

「うん。アルフが見つけたんだよ」

フェイトがそう言うとアルフが胸を張った

「ところで、オンセンって何だい？」

「……」

映司がフェイトの顔を見ると、フェイトも知らないという顔をしている

「ハッ！傑作だなあ、馬鹿丸出しだ」

「な、何だと！？じゃ、じゃあ、アंकは知ってるって言うのかい！？」

アルフはアंकに馬鹿にされて怒りながら言う

「温泉ってのはな、地中から湯が湧き出す現象や湯となっている状態、またはその場所を示すんだよ。それぐらい知つとけ、犬っころ」

アंकは憎たらしい笑みを浮かべてアルフに言った

「くうー！くーやーしいー！！」

アルフは頭を抱えてアंकに負けた事を嘆き始めた

「自然に沸いたお湯を大きなお風呂にして、みんなで入る場所だよ」

「大きなお風呂？」

「まあ、実際に見た方が早いかな」

そう言って映司は情報誌を取り出す

「なにそれ？」

「情報誌だよ。海鳴市の事ならコレを見たら大体はわかるはずだから。えーつと温泉街は・・・」

昨日の夜、アंकにスマホの使い方を聞いて、この本と情報を照らし合わせていたのだ

旅をするなら下調べが重要だという旅人の常識である

ページを捲る映司をフェイトはじっと見ていた

「ん、何？どうしたの？フェイトちゃん」

フェイトの視線が気になった映司は情報誌から目を離し、フェイトを見た

「えっ！？な、何でもないよ！本当だよ！？」

フェイトはいきなり目が合ってかなり慌てていた

「そ、そう？・・・あ、あった」

映司はフェイトとアルフに見せる

「えーっと、『ここは海鳴温泉街。来て満足！入って極楽！日頃の疲れを全部洗い流そう！』だって」

アルフがフェイトに聞かせるように情報誌を読み上げた

「今から予約取れるのか？そこに電話番号があるだろ、見せてみる」

アंकは映司から情報誌を奪い取り、書いてあった電話番号に電話を掛け始める

「映司、旅館って直に行ったら泊めてくれるんじゃないの？」

「さ、さあ？どうなんだ？アंक」

フェイトと映司の質問にアंकは呆れたように溜息をつく

「予約しなけりゃ泊まれない所も山ほどある。念のためだ」

恐らく、この中で一番常識を持っているのはアंकだろう

まあ、それもクイントに憑依したお陰なのだが・・・

『・・・はい、海鳴温泉、旅館山の宿です』

そうしていると、女性の声アंकの耳に入った

「ああ、宿に泊まりたいんだが、部屋は空いてるか？」

『はい。空いているお部屋もあります。ご予約していただければ確
実ですよ』

「そうか、明日行く。頼むぞ」

『承知いたしました。来客は何名でしょうか？あと、お客様のお名
前は？』

「大人1人と子供3人の4名だ。名前は火野だ」

『火野様ですね。ご来館お待ち申し上げております』

そう言うと、通話が切れた

「これで、大丈夫だろ」

そう言ってアंकはテーブルの上に情報誌を投げてソファーに寝転

がっ
た

「ありがとう、アंक。助かったよ」

「無駄足を踏むのはごめんだからなあ」

映司がアंकにお礼を言うと、アंकはそう言った

「じゃあ、明日の準備しようか」

「うん」

「はい」

映司の一声にフェイトとアルフは各々の返事で返し、明日の準備に取り掛かることにした

次の日

「海鳴温泉街」

バスに乗って4人は海鳴温泉街にやって来ていた

「へえ、こんなに沢山温泉があるんだ」

歩きながら映司はさっき貰ったパンフレットを見て呟いていた

「映司は温泉が好きなの？」

隣でフェイトがパンフレットを覗きながら言う

「特別好きって訳じゃないけど、気持ち良いから好きかな」

どうやら、800年前でも温泉はあったようだ

そして、4人は前日に予約した温泉旅館に着いた

「す、すいません、予約していたひ、火野ですけど・・・」

フロントでアルフがそう言うのと、法被を着た中年男数名と和服を着た妙齢の女性一人が笑顔で迎えた

「ようこそお越しいただきました。お部屋にご案内させていただきます」

女将らしき女性がそう言うのと、中年男が4人の前に寄ってきた

「お荷物をお持ちいたします」

「あ、じゃあこの子達の荷物をお願いします」

映司はフェイトとアルフの荷物を渡した

アンの荷物は自分の荷物と一緒に映司が持っている

部屋に案内された4人は荷物を受け取り、部屋の端に置くとそれぞれ自由な行動をとった

「綺麗な景色だねえ。フエイト」

「うん、でも、私達は旅行じゃなくてジュエルシードを探しに來た
って事を忘れちゃダメだよ？」

「わかってるよ」

フエイトとアルフは部屋から景色を眺めている

アंकはパンフレットを見て何かを探している

映司は4人分の茶を淹れていた

「2人とも、お茶淹れたよ。ほら、アंकも」

そう言うと映司は3人の茶をテーブルに置いた

「ありがとう。映司」

「何か食べる物ないのー？」

フェイトは素直に受け取り、アルフは食べ物の催促までしてきた

「この中に入ってるよ」

テーブルの上に来る途中で買ったお菓子をアルフの前に差し出した

「これからどうしようか？まだ日が暮れるまで余裕あるから今から探す？ジュエルシード」

「そうだね。今日は日が暮れるまで探そう。アルフは？」

「あたしは先に温泉に入るよ。フェイト、後で感想聞かせてあげるからねえ」

アルフはバスタオルと浴衣を持って浴場に向かった

「あ、うん。楽しみにしてるよアルフ」

良太郎とフェイトはアルフを見送った

「アंकはどうするんだ？」

「うまそうなアイスが無いか探してくる。映司、財布寄越せ」

「使い過ぎるなよ？」

そう言って映司はアंकに財布を渡した

すると、アंकも部屋を出て行った

旅館から出た映司とフェイトは早速ジュエルシード探しに取り掛かっていた

アルフが浴場に向かいアंकがアイス探しの旅に出た後、フェイトは探索魔法を部屋で使った

しかし、地理がわからない状態だった為、曖昧な結果となってしまう

地理さえ理解すればもっとハッキリとわかるらしい

フェイトにこの辺りの地理を記憶してもらう為、2人は旅館から出たということだ

「ごめんね、映司。もっとハッキリわかればよかったんだけど・・・」

隣に並んで歩いているフェイトが申し訳なさそうに謝った

「大丈夫だよ！フェイトちゃん！」

そう言いながら映司はフェイトの肩に手を置いて、フェイトの前に立った

「え？え、映司？」

「この温泉街の何処かにあるっていうのはわかってるんだから、見つかってるも同然だよ！だから、そんな暗い顔しちゃダメだ。ね？」

「・・・うん。そうだね。そうだよね」

「そうだよ。前向きに考えよう」

「うん！」

フェイトは映司に励ましに応えるように頷いた

映司は笑顔になり、フェイトの頭を撫でた

「え、映司。その・・・恥ずかしいよ」

フェイトは頭を撫でられ、顔を真っ赤にする

「ああ、ごめんね。フェイトちゃん」

映司はフェイトの抗議にあっさりと引き下がり、撫でるのを止めた

「あ・・・」

離れた瞬間、フェイトは残念そうな声を漏らした

「フェイトちゃん？」

「あ、ううん。な、何でもないよ！行こう！映司！」

フェイトは照れを映司に見られたくないのか早足で歩き出した

「フェイトちゃん、どうしたの？」

「な、何でもないっただけ！」

「あ、そ、そう・・・」

（何か怒らせるような事したかな？）

映司はフェイトが何故早足に歩き出しのか理解できていなかった

9歳とは思えない早足なので映司は走って追いかけた

アंकはアイス探しの旅から戻って来ていた

「まったく、夏限定なんて聞いてないぞ・・・」

どうやら、目当てのアイスは夏限定のアイスだったようで、今は春なので手に入らなかったようだ

「おまけに、ヤミーの気配が近くからするが、居場所はわからないと来た・・・何の嫌がらせだ？」

アंकはヤミーの気配がするのに居場所がわからない事にイライラしていた

仕方がないので温泉に入る事にして、向かっていたのだった

「チツ・・・。あ？何やってんだ？アイツ」

温泉を目指して通路を歩いていると通路の途中でアルフが、3人の

少女と絡んでいた

アंकはアルフに近付いて行った

「君かね？うちの子をアレしてくれちゃってるのは？」

アルフは3人の中の1人をマジマジと見て言う

「え、え？」

「あんま賢そうでも、強そうでもないし、ただのガキンチョに見えるんだけどねえ」

困惑している少女にアルフは訳のわからない事を言う

すると、金髪少女がアルフの前に立ち睨んだ

「『なのは』、お知り合い？」

「う、ううん」

後ろに下がっている『なのは』と呼ばれた少女は首を横に振る

「この子、あなたを知らないそうですが、どちら様ですか？」

金髪の少女はアルフにキツイ口調で尋ねた

両手に拳を作って精一杯強がっている

「ただの酔っ払いだ」

そう聞こえた瞬間、アルフの脳天に拳骨が繰り出された

「いったーい！！誰だい！？何すんのさ！？」

アルフが頭を押さえて振り返るとそこにいたのは右手をグリード化したアंकだった

「お前こそガキ相手に何やってんだ？」

「あ、アंक！？ち、違うんだよ！」

「言い訳は映司とフェイトがいる場所で聞いてやる」

「そ、そんな〜」

アルフにそう言い放つと、アंकはなのは達3人を見る

「この馬鹿犬が悪かったな。後で躰けておくから許してやってくれ」

「え、あ、はい・・・」

「行くぞ、アルフ」

アंकはアルフの首根っこを掴んで引き摺って行った

《お、覚えておきなよ！おイタが過ぎるとガブツといくからね！！》

アルフは引き摺られながらなのはに念話を飛ばして言うのだった

まあ、ガツンとやられたのはアルフだが・・・

アंकはなのは達から離れた場所に来ると、アルフの首根っこを離した

「ひ、酷いじゃないのさ！アंक！！」

「あのガキ、ジュエルシードを持ってるな」

アルフの講義を無視してアंकは言う

「え、えっ？気付いてたのかい？」

アルフは目をまん丸にして驚いたようにアंकに言った

「奴からジュエルシードの気配を感じた」

アंकは右手を人間体に戻して言う

「しかも、俺達より集めてやがる。気に入らない」

「そ、そこまでわかったのかい？ 凄いね、アंक」

「部屋に戻るぞ、映司と話して対策を立てる」

アंकはそう言って部屋に向かい歩き始めた

「あいよ。．．．それにしても、何で殴ったんだい？」

「イライラしてたんだよ」

「八つ当たり！？」

アंकにビックリするアルフだった

カラスが空を飛ぶ風景がさまになる夕暮れの時

海鳴温泉街は昼間以上に人で溢れていた

映司とフェイトはジュエルシード探しをしていた

「もう夕方だね、そろそろ切り上げようか？」

映司は茜色に染まって来た空を見て言う

「うん、そうだね。ジュエルシードの場所も特定出来て来だし、夜には捕獲出来ると思う」

フェイトも映司の意見に同意した

「じゃあ、ご飯食べてからアंकとアルフちゃんも連れてみんなで探しに来よう」

「うん」

そう話して、2人は旅館に向かって歩き始めた

その時、映司のスマホが鳴った

「あれ？アंकからだ。もしもし？どうしたんだ？アंक」

《映司、厄介な事になった。さっさと戻って来い》

「え？あ、わかった。すぐに戻る」

映司はそう言って通話を切った

「どうしたの？映司」

「何か、厄介な事が起こってるらしい。早く戻ろっ、フェイトちゃん」

「う、うん。わかった」

そう言って、2人は旅館に向かって走り出した

部屋に戻って来た映司とフェイトは既に帰って来ていたアंकとアルフの正面に座った

「で？厄介な事ってなんだよ？アंक」

「ジュエルシードを集めてる子がもう1人、この旅館に泊まってるんだよ」

アルフはちょっと言い難そうに映司に言った

「えっ？じゃあ、衝突するかもしれないって事？」

「そういう事だ」

映司の問いにアंकはアイスを食べながら頷いた

「・・・話せば譲ってくれそうな子じゃないのか？アंक」

「どうだろうなあ？俺も少し顔を合わせたただけだ」

「そっか……。フェイトちゃんとアルフちゃんはどっ思っ？」

映司はさっきから黙っているフェイトと俯いてるアルフに尋ねる

「どうだろう……。わからないよ……」

「あたしも……」

フェイトとアルフは俯いて言った

「そっか……。じゃあ、難しい事は考えないで、温泉入って、ご飯食べよっか」

「えっ？」

映司の提案に2人は驚き、アंकは不適な笑みを浮かべている

「わからない事をいくら考えてもわからないよ。そういうのって、なるようにしかならないし。マズイ事になったら俺とアंकが何とかするよ。ジュエルシードの交渉がしたいなら、アंकに頼めばう

まくやってくれる。だから、今はおいしいご飯食べて、戦う準備をしておこう?」

「・・・うん。そうだね」

映司の提案を聞いてフェイトは笑って頷いた

「映司、アンタ、良い奴だね! アンクは知らないけど」

「おい、もう1発喰らつとくか?」

「いや、それは勘弁しておくれよ!」

右手をグリード化させたアンクを見て、アルフは怯えたように言った

その時、部屋の電話が鳴り出したので、映司が受話器を取った

「はい」

《夕食はいつ頃お持ちすればよろしいでしょうか?》

相手は男性従業員だった

部屋の時計の時刻を見る

「・・・えーっと・・・１時間後くらいでお願いします」

《かしこまりました》

お互いに言つべき事を言い終えたので、電話は切れた

受話器を置くと、映司は鞆からバスタオルを出して浴衣を持った

「さてと、温泉行ってくるけど、アंकも行くか？」

「・・・温泉入った後のアイスもうまいかもなあ」

そう言つてアंकも用意していた浴衣とバスタオルを持った

「あ、待つて。私も行く」

フェイトも2人につられ、鞆からバスタオルを出して、浴衣を持った

「あたしももう1回入るーっと」

アルフは昼に入って気に入ったのか入浴する気満々のようで、既にバスタオルも持っている

1人で女湯に入る事に心細さと不安を持っているフェイトへの配慮であろう

結局、4人で温泉に向かった

「それじゃ、俺達より先に上がっても待たずに部屋に戻っていいから」

風呂場の入り口前にフェイトとアルフにそう言つと、映司は男湯の中に入っていった

「うん」

「わかったー」

フェイトとアルフも頷くと、女湯に入っていた

「・・・映司」

「ん？何？シャンプーか？」

頭を洗っていた映司はアंकに声を掛けられてシャンプーを渡す

「違う、しかもそれはボディーソープだ」

「ああ、ごめん。で、何だよ？」

「この温泉街からヤミーの気配がする」

「・・・ホントか？」

映司は頭を洗うのを止めて、アंकに尋ねる

「ああ。気配は感じるんだが、どういふ訳か居場所がわからない。
しかも、メダルが異常な速度で溜まってやがる」

「・・・ジュエルシードのせいかな？」

「願いを叶える石、か。十分にありえるなあ」

「そうか・・・。とりあえず、フェイトちゃん達から離れないようにしておかないとな」

「ああ、今はそれしかない」

2人は溜息をついて、各々身体を洗い始めた

温泉から上がり、夕食を食べ終えた後、4人は森の中を歩いていた

しかし、決して散歩ではない事は4人の真剣な表情からわかる

フェイトとアルフはバリアジャケットをすでに纏っている

映司は普段と変わらないが腰にドライバーを装着し、アंकは右手をグリード化させている

先ほど探索魔法を用いた結果、海鳴温泉街の森の中にあるということがわかった

だが、森の中といっても何処も似たような風景なのでピンポイントで見つける事は出来なかった

ここからは自分達の目が頼りになる

「森の中っていつでも結構広いし暗いんだねえ」

アルフが草の根を分けたり、木の枝に引っかかっていたりしないかとキョロキョロしている

「みんなで探せばすぐに見つかるよ、フェイトちゃんが頑張ったんだから俺達も頑張らないと。アंक、頼むぞ」

映司は草むらを掻き分けながら言う

「お前も探せ」

小さな炎を出し、照らしながらアंकは探している

「出てこーい！ジュエルシード！」

アルフはジュエルシードを呼びながら茂みを掻き分けながら探す

「呼んでも出てこないって・・・」

映司とアルフがそんなやりとりをしながら探している姿を見てフェイトは小さく笑みを浮かべていた

（ジュエルシードが発動してくれればすぐに見つかるんだけど・・・）

フェイトがそのような希望を内に秘めた時だった

「「「・・・ッ!」「」」

フェイトとアルフとアंकの動作が急に停まった

「どうしたの？2人共？アंकまで」

映司は3人の動きが止まったのを見て尋ねる

「映司、見つけたよ」

「遅れないでね!」

そう言うと同時に、フェイトとアルフは森の中に潜って行った

「ま、待ってよ!2人共!アंक!」

「わかってる。行くぞ」

アंकは答え、2人はフェイトとアルフを追い掛けた

森の中でありながら小さな川があり、それを渡れるように小さな橋が架かっていた場所

そこにフェイトとアルフ、そして映司とアंकはいた

4人は川の一部分から発せられていると思われる天上に向かって昇っている1つの光を見ていた

「凄いねえ。これがロストログアのパワーってやつ？」

「随分と不完全で不安定な状態だけだね」

アルフはジュエルシードの発動に素直に感心し、フェイトは対照的に冷静に分析していた

「これがジュエルシードの発動状態なんだ。何か凄いな」

「メダルに比べれば大した事ない」

映司は感心していたが、アंकは大した事ないと言い切った

「アンタのお母さんは何であんな物を欲しがるんだろうね？」

「さあ？わからないけど、理由は関係ないよ。母さんが欲しがってるんだから、手に入れないと」

そう言つてフェイトはバルディッシュを握る

「バルディッシュ、起きて！」

「Yes sir」

フェイトの左手の手袋の甲からスタンバイフォームのバルディッシュが外れ、デバイスフォームになってフェイトの手に握られる

「封印するよアルフ。サポートお願い。映司とアंकは危ないから下がつて」

「へいへい」

「わかった、気をつけてね。フェイトちゃん、アルフちゃん」

「さっさと片付けろ」

フェイトはバルディッシュをシーリングモードにする

周囲に黄金の光が稲妻状に走り、川の水が蛇か竜のような動きを見せた

映司とアंकはフェイトがジュエルシールドを回収するのを見守っていた

「これで、3つ目」

フェイトの手にジュエルシールドが収まった時、肩にフェレットを乗せ、白い服を着た少女・なのはがやって来た

「あゝあらあらあらあら。やっぱり来ちゃったか」

「お前、あらって何回言っただ。白々し過ぎるだろ」

アルフの発言にアंकは小さな声でツツコンだ

「ああ!？」

なのははアルフの事を思い出したらしく、声を漏らした

「子供は良い子でって、言わなかったっけか？」

アルフはなのはに言う

「何処の悪役だ？」

またアंकは小さな声で言った

「それを、ジュエルシードをどうするつもりだ!？それは、危険な物なんだ!！」

なのはの肩に乗ったフェレットが叫ぶように言う

「・・・フェレットが喋ってる」

映司は喋っているフェレットを見て呟く

「さあね？答える理由が見当たらないよ。それにさあ、あたし親切で言ったよね？良い子でないとガブツと行くよって」

「っ!？」

アルフの言葉になのはは警戒を強めた

次の瞬間、アルフの全身が光りだした

やがてその光は人の姿から別のものになっていく

その姿は大きな狼の様なものになった

「・・・本当に狼だったんだ」

「俺からしたら犬も狼も一緒だ」

小さな声で話している映司とアंक

「アンタ達！さっきから聞こえてるんだよ！！ちょっとは驚いたら
どうだい！！」

「うわぁ！？ごめんごめん、アルフちゃん！」

「こっち向くな、涎が汚いんだよ！！」

「何だって！？もう怒った！ガブツと言ってやる！！」

アルフはなのはを放置してアंकとじゃれ付き始めた

「やっぱり彼女は使い魔だったか」

狼のアルフを見てユーノが言う

「使い魔？」

なのは聞いた事のない言葉に首を傾げた

「そう。あたしはこの子に造って貰った魔法生命。主の魔力を命とする代わりにその命と力の全てを賭けて護るのさ」

アルフが自分について説明した

「涎でベタベタにしゃがって・・・」

その後ろではアンクが涎に汚れた服を見つめている

「全身グリード化すればいいんじゃないか？」

「ああ、そうか」

そう言ってアンクは全身をメダルで覆い、グリード化した

「「「「・・・」」」」

それを見たフェイト、アルフ、なのは、フェレットは口をあけて驚

いていた

「あ？何見てんだ？」

アंकは人間体に戻り、服の涎が消えている事を確認してから首を傾げた

「あ、アंक？さっきのは何？変身魔法？」

フェイトはアंकに恐る恐る尋ねる

「あ？言っただろ、俺はグリードだ。さっきのが俺の本当の姿だ」

アंकは何言っただという顔をしてフェイトに言った

「アंकのグリード態、かっこいいよな」

映司は久しぶりに見たアंकのグリード態に感心しながら言った

「・・・あ、そうだ。ジュエルシールドだよ。君も集めてるんだよね？どうして？」

映司はジュエルシードを何故集めているのかなのはに尋ねた

「え？あ、はい。お友達の捜し物だからお手伝いしてるんです。あ、でも、今はそうじゃなくて、私がしたいからって言うか……。と、とにかく！私は私の意志でジュエルシードを集めてます！」

「へえ、そうなんだ。その友達って言うのは、その肩の？」

映司はなのはの肩に乗っているフェレットを見て言った

「え？あ、はい。『ユーノ』君です。ジュエルシードは元々ユーノ君が発掘した物なんです！」

「ああ、そう。でも、フェイトちゃんにも譲れない物があるんだよね？フェイトちゃん」

「う、うん。母さんの為だから……。ジュエルシードは譲れないんだ！」

フェイトは急に振られた為、少し慌てたが答えた

「そうなんだ、教えてくれてありがとう」

「え？」

なのはの急な言葉にフェイトは少し驚く

「この前会った時は教えてくれなかったから……。何もわからな
いまま戦うのは、やっぱり嫌だもん。あなたにも、やっぱり譲れな
い物があるんだね」

なのはは自身のデバイス『レイジングハート』を降ろし、優しく笑
いながら言った

「でも、私にも譲れない物があるんだ。ジュエルシードが暴走した
ら、たくさんの人に被害がでちゃう。そんなの嫌だから私はジュエ
ルシードを集めてるんだ」

「・・・そっか。じゃあ、勝負しよう。お互い、ジュエルシードを
1つずつ賭けて！」

「うん！」

そう言つて2人は自身のデバイスをそれぞれ構えた

「・・・映司、何であんな子にフェイトがジュエルシードを集める理由を教えたんだい？」

そんなフェイトとなのはを見てアルフは映司に言った

「あの子も言つてたけど、何もわからないまま戦うなんてやっぱり嫌でしょ？そんなの機械でも出来るし。俺達には自分の意思もある、話せる口も言葉もある。なら、まずは話し合おうよ。そうすれば、お互い分かり合えるかもしれない。それでも譲れない物があるのなら戦えばいい。でも、それは、敵とかじゃなくて、お互い競い合うライバルみたいになれるんじゃないかな？絶対にそっちの方がいいでしょ」

映司は腕を組んでフェイトとなのはを見て言った

「そっか・・・そうだよな。やっぱり凄いね、映司は」

アルフは映司の顔を見上げてそう言った

なのはとフェイトの対決

先に動いたのはフェイトだった

なのはの後ろに回り込み、バルディッシュを振るう

「くっ！」

「F l i e r f i n」

なのはは足からフライヤーフィンを展開し、空に舞い上がってフェイトの初撃をかわした

フェイトも、なのはを追って空を飛ぶ

「なのは！」

それを見てユーノはなのはを助けようとした

「ダメだよアンタ！これはあの子達の真剣勝負なんだ！」

それを見てアルフはユーノを止めた

「そうだよ、ユーノ君。あの2人の邪魔をしちゃダメだよ」

そう言いながら映司はユーノを抱き上げた

「でも……」

「ユーノ君はなのはちゃんの友達なんですよ？だったら、信じてあげないと」

「……はい。そうですね」

そう言ってユーノは戦っているなのはを見上げた

（なのは、頑張っ！）

そして、心の中で応援していた

場面は戻ってなのはとフェイトの空中戦

フェイトの足元と前方に魔法陣が展開された

「Thunder smasher」

バルディッシュから金色の閃光が放たれる

「Divine buster」

なのはのレイジングハートからも桜色の閃光が放たれた

2つの閃光が火花を散らせて激しく衝突し合う

「レイジングハート！お願い！！」

「All right」

なのはの一声でレイジングハートは更に威力の高い一撃を放った

桜色の閃光が更に勢いを増して金色の閃光を押ししていく

「ッ!!」

金色の閃光が桜色の閃光に掻き消され、フェイトは少し表情を強張らせた

しかし、冷静に状況を判断しフェイトは次の手を打つ事にした

なのはが放ったデイベインバスターはフェイトが放ったサンダースマッシャーを完全に消し去った

地上で見ていたユーノは驚いた

「なのは・・・強い!」

だがフェイトの使い魔アルフは冷静だった

「でも・・・魔法に関してはまだ素人みたいだね、甘いよ」

アルフは勝負の結末を読んだ

なのはが放ったデivainバスターはフォトンランサーを完全に消したが、そこにはフェイトの姿はなかった

「Scythe Slash」

「なのは!!」

ユーノがフェイトの姿を見つけ叫ぶ

「あっ!?!」

なのはもフェイトの姿を見つけたが既に遅かった

フェイトがバルディッシュのサイズモードにし、なのはの首元に突きつけていた

「・・・にやはは、負けちゃった」

「・・・」めんね

フェイトはなのはに向かって謝った

「どうして謝るの？あなたが強かったただだよ。レイジングハート」

「Pull out」

レイジングハートから女性の電子声が聞こえて、赤いコアからジュエルシールドが1つ出てきた

「はい、コレ」

なのはは潔く、フェイトにジュエルシールドを渡した

「・・・あ、ありがとう」

「うっん、次は負けないからね」

なのはは笑ってそう返した

「・・・うん」

なのはの言葉にフェイトは頷いた

戦いが終わり、2人は完全に緊張の糸が切れ油断してしまっていた

「ジュエルシールドをよこせえ！！！！！！」

緑の身体に鎌を持つ怪物・カマキリヤミの攻撃が少女達を襲った

第3話『温泉ともう1人と理由』（後書き）

C o u n t T h e M e d a l s !

現在、オーズが使用したメダルは？

『タカメダル』×3

『トラメダル』×1

『チーターメダル』×1

『クワガタメダル』×1

『カマキリメダル』×1

『バッタメダル』×1

『ウナギメダル』×1

第4話『欲望と願いと進化』（前書き）

C o u n t T h e M e d a l s !

現在、オーズが使用したメダルは？

『タカメダル』×3

『トラメダル』×1

『チーターメダル』×1

『クワガタメダル』×1

『カマキリメダル』×1

『バッタメダル』×1

『ウナギメダル』×1

第4話『欲望と願いと進化』

魔法少女リリカルなのは

～仮面の戦士～

前回の3つの出来事――

1つ、ジュエルシードを求めて、映司達は海鳴温泉にやって来た

2つ、フェイトは同じくジュエルシードを求める少女、なのはに再会する

そして3つ、対決後に油断していた2人にカマキリヤミーの鎌が襲い掛かった

第4話『欲望と願いと進化』

戦う者なら皆、戦闘後に1番油断してしまう

それは、2人の魔法少女も一緒だった

「ジュエルシードをよこせえ！！！！」

フェイトとなのはは不意を突かれ、動く事が出来なかった

相手が人間だったなら話はまた違っただろう

バリアを張り攻撃を防ぐなり、回避行動を取るなり出来た筈だ

しかし、相手は人間ではなくカマキリの怪人だった

油断しているところにいきなり怪人が現れれば、一瞬でも思考は停止してしまうだろう

戦場ではその一瞬が命取りになってしまう

しかし、なのはとフェイトには救いがあった

それは彼女達の傍に、目の前にいる怪人とずっと戦って来た戦士がいた事だった

《TAKA!》《KUJYAKU!》《BATA!》

「はあっ!」

「ぐあああ!」

カマキリ・ヤミーの鎌は2人には届かなかった

下から飛んで来たエネルギー弾を受け、カマキリヤミーは重力に従い落ちていった

「大丈夫!? フェイトちゃん! なのはちゃん!」

その声に下を向くと、そこにいたのはオーズ・タカジャバだった

時間は少し遡り、なのはとフェイトの対決に決着がついた頃――

「・・・ッ!?おい、映司!ヤミーだ!」

アंकがいきなり現れたヤミーの気配に驚き、映司に伝える

「え!?ど、何処!?何で急に!?!」

映司は辺りを見回してヤミーを探す

「知るか!さつさと変身しろ!奴の狙いはジュエルシールドだ!」

そう言つてアंकは映司にメダルを投げ渡す

映司はメダルを受け取り、ドライバーに入れ、スキヤナーを滑らせた

「変身!」

《TAKA!》《KUJYAKU!》《BATA!》

円形の様々な色の力の紋章が映司の周りを踊る

そして、映司の胸に紋章が刻まれ、力が宿った

映司はオーズ・タカジャバに変身した

オーズは『鷹の目』でヤミーの姿を探す

「・・・見つけた!」

森からフェイト達に向かって飛び出したのを見つけた

「はっ!」

オーズは『孔雀の翼』を広げ、空に舞い上がった

「映司!飛べたのかい!?!」

空に舞い上がったオーズを見てアルフは言った

「オーズが飛べないなんて誰が言った？」

驚いているアルフを見てアंकは不敵に笑っていた

「へ、変身した！？あれは一体！？」

ユーノはオーズを呆然と見ていた

「ジュエルシードをよこせえ！！！！！！」

カマキリヤミーはフェイトとなのはに鎌を振り下ろそうとしていた

オーズは左腕に装着されたタジャスピナーをカマキリヤミーに向ける

「はあっ！！」

タジャスピナーからエネルギー弾が発射され、カマキリヤミーに直撃した

下から飛んできた攻撃を受け、カマキリヤミーは重力に従い落ちていった

「大丈夫？ フェイトちゃん！なのはちゃん！」

オーズはフェイトとなのはに声を掛けた

声を掛けられたフェイトとなのはは驚いていた

「え、映司！？と、飛べたの！？」

フェイトはアルフと同じく、オーズが空を飛んでいる事に驚いていた

「え、映司さんって、さっきいたあのお兄さん！？」

なのははオーズの存在とさっき襲ってきた怪人に驚いていた

「うん、もう大丈夫だよ。あのカマキリは俺に任せて」

そう言って、オーズはカマキヤミーを追って降下して行った

「ぐううう！貴様ア！！よくもオ！！」

カマキリヤミーは苦しみながら立ち上がり、着地したオーズに向かって来た

「うわっ！？」

オーズは受身を取って避け、蹴りを見舞い、カマキリヤミーと距離を取る

「接近戦なら！」

オーズは『クジャク・コア』を『トラ・コア』に変え、スキャンする

《TAKA!》《TORA!》《BATT!》

《TA・TO・BA!TATOB A!TA・TO・BA!》

オーズはタカジャバからタトバコンボになりトラクローを構える

「ふっ!はっ!とりやつ!はあっ!!!」

「グアアアアア!!!!!」

カマキリヤミーを何度も切り裂き、吹き飛ばした

「アंक!アルフ!映司は?」

地面に降りたフェイトとなのははオーズの戦いを見ているアंकとアंकに駆け寄った

「あそこだ」

アंकは視線を外さずにフェイトとなのはに顎で指して言う

「凄い・・・」

アルフはオーズとカマキリヤミーの戦いを驚愕しながら見つめていた

《TAKA!》《TORA!》《BATT!》

《TA・TO・BA!TATOB!TA・TO・BA!》

「あ、変わった。初めて戦った時のオーズだ」

アルフがタカジャバからタトバコンボになったオーズを見て言う

「メダルを変えたら姿と力が変わるんだね」

フェイトはメダルを変えていたオーズを見て言った

「ふっ！はっ！とりゃっ！はあっ！..」

「グアアアアア！！！！」

オーズはカマキリヤミーを何度も切り裂き、吹き飛ばした

「す、凄い……」

なのはは初めて見たオーズに驚いていた

「あのメダル。ロストログア並の力を秘めているかもしれない……」

「ユーノはオーズが使っているコアメダルを見て冷静に力を分析していた」

「……アंक、あの虫みたいなのは何なの？」

「フェイトはオーズが戦っているカマキリヤミーを見て、アंकに尋ねる」

「……あれはヤミー、オーズの敵だ。俺達はいっつらを追ってこの世界に来た」

「そうなんだ」

「映司はいつもあんな奴等と戦ってたのかい？ 凄いねえ」

フェイトは視線をオーズに戻し、アルフは感心して見ていた

アंकはヤミーがどういう物か、詳しくは教えなかった

そして、自分達がこの世界に來た理由も誤魔化した

ヤミーもオーズもコアメダルもセルメダルも、元は『人間の欲望』から生まれたのだ

しかし、それを知るにはフェイト達はまだ幼いと映司は考えたのだ

「まあ、余計な事を話さなければ問題ないか」

アंकは余計な思考を止めて、オーズを見た

「セイヤアア!!」

オーズはトラクローで突きを放ち、怯んだカマキリヤミーを横に大きく切り裂いた

「グアアアアア!!!!」

カマキリヤミーは後ろに転がり、切り裂かれた胸を押さえる

そこにはトラに引っ掛かれたような傷が出来ている

その傷からセルメダルが零れた

「お、おのれえ・・・もっと力が・・・力が必要だア!!!!」

カマキリヤミーは立ち上がりそう叫んだ

すると、カマキリヤミーの胸が輝いた

「あの光は！？」

オーズはその光に見覚えがあった

「なに！？」

アंकもその光を見て驚いていた

「あれって・・・フェイト！」

「うん。ジュエルシードの光だ！」

そう、カマキリヤミーから放たれた光は、先程見たジュエルシードの光だった

「な、何なんだ！？」

オーズは光を放ったカマキリヤミーを見つめていた

「映司！」

すると、さっきまで後ろで見ていたアंकが駆け寄って来た

「ジュエルシールドだ！やっぱり持ってやがった！」

アंकはカマキリヤミーを見て言う

「どうしたらいいんだ？攻撃していいのか？」

そう話している内に、カマキリヤミーが放っていたはずの光が徐々に収まっていった

「なんだ？」

アंकが見ると、カマキリヤミーの周りに大量の札束が山積みになっていた

「お金？」

「……あれが宿主の欲望か」

そう見てゐる内に、カマキリヤミーは札束を食べ始めた

「800年、俺達が封印されている間に人間の欲望はさらに強く、大きくなった、か。アंकの言う通りだ」

「一体、どんなヤミーが生まれてくるか、見物だな」

アंकは不適に笑いながらカマキリヤミーを見ていた

そして、大量の札束を食べ終えたカマキリヤミーの身体から這い出すように新たなヤミー

大型の昆虫型ヤミー「オトシブミヤミー」が生み出された

GAAGAAGA!
!!!!!!!!

産声を上げたオトシブミヤミは更なる欲望を求めて動き出す

手始めに、ユーノとなのはが張っていた結界に喰らいついた

オトシブミヤミーが一部を喰らったせいで、結界は崩壊してしまった

「そんな！？結界を食べた！？」

ユーノはそれを見て驚愕した

「よくもまあ、今まで滅びなかったもんだな。こんな『モノ』抱えて・・・」

生み出されたヤミーの醜悪な外見にアंकは呟いた

「ま、そのおかげでお前等が存在出来てるんだ。感謝しろよ」

アंकの背中をポンと叩き、そう言ってオーズはオトシブミヤミーに向かって行った

「・・・フツ、そうだな」

アंकは鼻で笑ってオーズに続いた

「はあ
ああああ！！！！！」

オーズはオトシブミヤミの下に滑り込み、前に出る

それと同時にトラクローでオトシブミヤミの足を斬りつけた

すると、メダルが飛び散り、森のあちこちに落ちていく

それを近くにいたアंकがその身体に取り込んでいく

G U G Y A A A A A A A A A A ! ! ! ! ! ! ! ! !

「!?!?..うっ..わあああ!?!」

オトシブミヤミィは巨大な爪を使いオーズを弾き飛ばした

「・・・げ!?!・・・やばっ・・・」

オトシブミヤミーは更にオーズに攻撃を仕掛けようとするが、オーズは横に転がり避ける

そんなオーズを見て、アंकはすぐに『カマキリ・コア』を取り出した

「映司! ったく、何やってんだ! ほらよ!」

そう言つて『カマキリ・コア』をオーズに投げ渡した

「ちよつと油断しただけだ!」

オーズは起き上がつてメダルを受け取り、『トラ・コア』を『カマキリ・コア』に変えてスキャンした

《TAKA!》《KAMAKIRI!》《BATA!》

オーズはタカキリバに変化し、『カマキリソード』を構えてオトシ

フェイトとアルフ、なのはとユーノはその様子を見てオーズを応援していた

「はっ！はっ！・・・セイヤー！！」

オーズが更に力を入れて斬りつけると、オトシブミヤミーはズンツと重い音を立てて倒れた

「やった？」

フェイトがオトシブミヤミーが倒れたのを見て言う

しかし――

GUGAAAAA!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
!!!!!!!!!!

「!?!?・・・つく・・・うわああああ!?!」

倒れていたヤミーがいきなり起き上がり頭でオーズを跳ね飛ばす

「「映司っ！？」」

フェイトとアルフは吹き飛ばされたオーズに向かって走り出した

それになのはとユーノも続く

「くっそ！死んだ振りは卑怯だろ！！」

オーズは身体を起こしながらオトシブミヤミーを見る

「油断したお前が悪いんだよ！さっさと立て！！」

アंकはオーズの頭を叩いて立ち上がらせる

「でも、ちょっと頑丈すぎないか？アイツ」

オーズはさっき斬りつけた傷が既に治っているのを見て言う

「ジュエルシードのせいか、人間の欲望が強くなったのか。どっちなんだろうなあ」

アंकはオトシブミヤミーを見て嘆くように言った

「どっちでもいいよ！今はアイツを何とかしないと！」

そう言っで、オーズは立ち上がる

「・・・1つ手がある。アイツ等の力を使う」

「えっ？」

アंकは駆け寄ってきている4人を見て言った

「ジュエルシードを俺達が引き剥がして、アイツ等が封印する。その後、お前がトドメを刺す」

アंकは考えた作戦をオーズに話す

「・・・それしかないなら、やるしかないか」

オーズは決断した様にオトシブミヤミーを見た

「映司！アंक！アイツ、温泉街の方に向かって行くよ！」

2人が話している間に、駆け寄って来ていたアルフがオトシブミヤミーが温泉街の方に行くのを見て言う

結果が無くなってしまった今、オトシブミヤミーが暴れば、大変な事になってしまう

「うん、わかってる。被害が出る前に片付けるから、みんなの力を貸してくれないかな？」

オーズはフェイト、なのは、アルフ、ユーノを見て言う

「え？ど、どどういう事？」

「さっきの光、あれはジュエルシードの光だ。お前等が封印するんだよ」

アंकは首を傾げている3人に言う

「アイツからジュエルシードを剥ぎ取るから、さっきみたいに全力で魔法を撃ってほしいんだ。出来る？」

「うん！出来るよ、映司」

「フェイトのサポートは任せときな！」

「私もお手伝いします！」

「僕も、出来るだけの事はします」

オーズの問いに、4人は強く返事をした

「よし！じゃあ、みんなでやっつけよう！」

《TAKA!》《KUJYAKU!》《BATA!》

オーズは再びタカジャバになり、アंकと共に空に舞い上がった

それにフェイトとアルフ、肩にユーノを乗せたのはも続く

を模したエネルギーの渦が発生する

「はあああ・・・セイヤアアアア!!」

「おらッ!」

オーズが放ったエネルギー弾にアंकが炎を乗せてオトシブミヤミ
ーに叩き込み、大きな傷を生んだ

すると、その傷から1つのジュエルシールドが飛び出した

「デイベイインバスター!!」

「Divine buster」

「サンダースマッシュ!!」

「Thunder smasher」

それを見たのはとフェイトはそれぞれの封印砲を放ち、ジュエル
シールドを封印した

オトシブミヤミーはジュエルシードを取り戻そうと身体を返し、2人に巨大な前足を振り上げる

「邪魔はさせないよ！」

反り返っている様な体勢をしていたオトシブミヤミの腹に複数のフォトンスフィアを体の周囲に生成し、フォトンランサー・マルチシヨットを放った

G U G Y A A A A A A A ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! !

! ! ! ! ! ! ! ! ! ! !

オトシブミヤミは引つ繰り返り、もがき苦しんだ

「動きを封じる！」

ユーノは魔力の鎖を生成し、オトシブミヤミを拘束した

それを見たオーズはまたメダルを変え、スキャナーを滑らせる

《TAKA!》《TORA!》《BATT!》

《TA・TO・BA!TATOB!TA・TO・BA!》

「決めろ!映司!」

タトバコンボに戻ったオーズにアंकが言う

「わかった!」

《Scanning Charge!》

「はああ・・・」

オーズはもう一度メダルをスキャンし、空中で一回転する

すると、オトシブミヤミーに向かって落下するオーズの先に赤、黄、緑の3つのリングが発生した

「セイヤアアア!!!!!」

赤を潜ると赤い翼が発生し、黄を潜ると黄の斬撃が加わり、緑を潜ると蹴りの威力が倍増する

タトバコンボの必殺技『タトバキック』がオトシブミヤミーに炸裂した

G U G Y A A A A A ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! !

後にはオトシブミヤミの断末魔と爆発、オーズの3色のリングが輝いていた

「本当にメダルで出来てたんだね」

フェイトはオトシブミヤミミが撒き散らしたメダルを拾いながら言う

「ヤミーもグリードも、身体はセルメダルで構成されてる。人間で言う水とタンパク質だ」

アंकは凄い勢いでメダルを身体の中に取り込みながら言った

「グリードは力を使うとセルメダルが減るから、こうして補充しないとダメなんだよ」

映司は拾ったセルメダルをアंकに投げ付けながら言う

「今回は100単位で稼げた。上出来だ」

アंकはメダルを全て取り込み終え言う

「あ、あの、これ・・・」

「え？」

なのはがおずおずとさっき封印したジュエルシードを映司に差し出した

「・・・いいの？」

「さっきのヤミーって言うのを倒したのは映司さんですから」

「そっか、ありがとう。なのはちゃん」

そう言っつて映司は笑い、なのはの頭を撫でて言った

「あ、あの・・・ちょっと、恥ずかしいです・・・」

なのはは顔を赤くして俯き言った

「・・・」

そんなピンクな空気に包まれている映司となのはを見てフェイトから禍々しいオーラが飛び出していた

「・・・ね、ねえ、アंक？何だい？あの禍々しいオーラは？フェイトがあんなオーラを出した事なんて一度も無いよ？」

「・・・人間が持つ厄介な物の1つだな」

そんなフェイトを見てアंकとアルフは少し怖くなったのだった

「え、映司！もういいでしょ！」

「え？なに？フェイトちゃん」

「そ、その子も恥ずかしがってるし！もういいよ！」

フェイトは映司に向かって必死に訴え掛けた

「・・・あ、そうだね。ごめんね？なのはちゃん」

映司はフェイトの抗議を聞いて、なのはを撫でるのを止めた

「あ・・・」

離れた瞬間、なのはもフェイトと同じ様に残念そうな声を漏らした

「なのはちゃん？」

「え？あ、な、何でもないです！」

なのは手と首を振って何か焦った様に言った

「・・・」

それを見たフェイトは黒いオーラを更に大きくした

「じゃあ、そろそろ帰ろうか。もう夜も遅いし」

映司は真っ暗な辺りの森を見て言う

「そうだね。早く帰ろうか」

そう言って、フェイトは映司の袖を掴んで強引に引っ張り歩き出した

「ちょ、ちょっと？フェイトちゃん？」

映司は物凄い力でフェイトに引っ張られ、よたよた歩き始める

「・・・あつ！ちよつと待って！」

「・・・？」

「ん？」

なのはに大きな声で呼び止められ、映司とフェイトは振り返る

「名前！あなたの名前を教えて？」

「・・・フェイト、フェイト・テストロッサ」

「私はなのは！高町なのはだよ！私立聖祥大付属小学校3年生！」

なのはは何故か自分が通う学校までフェイトに教えた

「・・・覚えておくよ。帰ろう、映司」

そう言ってフェイトはまた映司を引っ張って歩き出す

「あ、うん。じゃあね、なのはちゃん！早く帰らないとダメだよ！」

「はい！さようなら！」

そう言って映司はフェイトに連れられて旅館に帰って行った

「・・・俺達も帰るか」

「そうだね、あたしももう眠くなってきたよ」

アंकはアルフに向かって言い、アルフはそれに頷く

「お前等もさっさと旅館に帰れ」

「あ、はい。帰ろうか、ユーノ君」

「うん。お疲れ様、なのは」

アंकに言われ、なのは達も歩き出した

旅館に戻り、部屋に辿り着くと、フェイトとアルフはすぐに眠ってしまった

ジュエルシードの封印、なのはとの戦闘、ヤミーとの戦闘で疲労が溜まっていた様だ

映司とアंकはソファに座ってアイスを食べていた

「なあ、アंक。あのヤミーって、コノハが作ったタイプのヤミーだよな？」

「ああ。宿主の欲望の対象を喰うか、ヤミーの行動で欲望を満たして、成長体・完全体になるタイプだ。今日戦ったのは、宿主の欲望の対象を喰うタイプだな」

アंकはアイスの最後の一口を食べて言う

「コノハが作った・・・とは考えられないよな。一体誰が・・・」

映司は顎に手を当てて考える

「この世界にあの馬鹿がいれば間違えて作ったと考えられるが、いないからな。一体何処の誰が作ったんだかなあ」

アंकは窓の外の夜の闇に包まれた山を見る

「・・・もし、他のタイプのヤミーも相手が作れるなら、『コンボ』も使わないといけなくなるのかな」

「ああ、そうだな。しかも、ジュエルシードも使ってくる。シャルのタイプのヤミーなんか考えたくもないな」

アंकは勘弁してくれと言わんばかりに言う

それもそうだろう、シャルの作る水棲系ヤミー

ヤミーの卵が多数寄せ集まった巣を宿主の拠点に形成し、巣はヤミーが孵化するまで認知できない

今回ヤミーの気配を見つけられなかったという事は、その巣も見つ

けられないという事だ

しかも、ヤミーはジュエルシードの力で、都合の良い様に欲望を叶えることが出来る

そうすると、ヤミーを見つけるのは極限に難しい事になるのだ

「シャルのヤミーって、大量に湧いて来る奴だよな。あれに対抗出来るのはやっぱり『コンボ』か」

「そうならないように祈ってる。俺はもう寝る」

そう言ってアंकは立ち上がり、敷いていた布団に寝転がった

「俺も寝よ。おやすみ、アंक」

映司とアंकは眠りにつくのだった

く海鳴市く

映司が海鳴温泉でフェイトとジュエルシードの位置を特定していた頃――

海鳴市では、黒いローブを着た男は次のヤミーの宿主を探していた

「ふむ、良い欲望を持った人間はいないものか・・・」

男は人が行き交う交差点を見つめながら良い欲望を探していた

「・・・ほづ、いるではないか」

男は買い物袋を大量に持った女性を見て呟いた

男は女性を追い、彼女が住む高級マンションまでやって来た

そして、周りに誰もいないマンションの廊下に辿り着いた

女性はエレベーターの扉を鏡の代わりにして、自分が着た服を見て

いた

その彼女の後ろに、男が現れた

「それは、全てお前が買ったのか？」

「・・・そうだけど、あなた、誰？」

「たくさん買うのが好きなのか？」

女性の問いには答えず、男はまた問う

「・・・たくさん？これぼっちで？馬鹿言わないでよ」

女性はもう関らないでおこうと考えそう言って、前を向いた

その答えを聞いた男はニヤリと笑い、セルメダルを取り出した

「その欲望、解放しろ」

男はセルメダルを女性の後頭部に現れたスロットに投げ入れた

女性はその瞬間、気を失い、倒れた

女性が倒れた数秒後、男の手に水色の玉が現れた

「フッフッフ。お前の欲望、ありがたく使わせてもらっぞ」

そう言つて、男はその水色の玉・ヤミーの卵にジュエルシードを捻じ込んだ

すると、ヤミーの卵は淡く輝き、消えた

「さあ、『コンボ』の力を見せてくれ。オーズ」

そう言つて、男は姿を消した

第4話『欲望と願いと進化』（後書き）

C o u n t T h e M e d a l s !

現在、オーズが使用したメダルは？

『タカメダル』×3

『クジャクメダル』×3

『トラメダル』×1

『チーターメダル』×1

『クワガタメダル』×1

『カマキリメダル』×1

『バツタメダル』×1

『ウナギメダル』×1

PV10000アクセス突破記念（前書き）

今回はタジャスピナーの設定とかそんな感じです

「はあああ・・・セイヤアアアア！」

「おらッ！」

オーズが放ったエネルギー弾にアंकが炎を乗せてオトシブミヤミ
ーに叩き込み、大きな傷を生んだ

映司「・・・」

アंक「ん？どうした？映司」

映司「ああ、アंक。あのさ、このシーンなんだけどさ」

アंक「あ？・・・オトシブミヤミーにお前がギガスキャンを叩き
込んだ場面だな」

映司「うん」

アंक「それがどうかしたか？」

映司「・・・タジャスピナーって入るメダル、7枚じゃなかったっけ？10枚だっけ？それに、7枚入っても音声は6枚しかスキヤン音でないよな？何で10枚全部音声出てるの？」

アंक「・・・ああ、その事か」

映司「作者間違ったのかなあ・・・」

アंक「それは、この小説のオリジナル設定だ。10枚にしとくと何かと都合がいいんだよ」

映司「都合？10だと何か良い事あるのか？」

アंक「10っていう数字を聞いて、何か思い出さないか？」

映司「10？・・・あっ！デイ——」

アंक「それ以上はネタバレだ」

アंक「それに、ドライバーと合わせれば13になるな」

映司「13?・・・13・・・13・・・」

アंक「ヒントは、平成だ」

映司「え?平成?・・・なんだろう・・・?」

アंक「頭の良い読者にはわかっただろうよ」

映司「なあ、アंक」

アंक「あ?何だ?」

映司「これってさ、PV10000突破記念なんだよな?」

アंक「ああ、らしいな」

映司「・・・まだオリジナル設定しか説明してないぞ？」

アंक「・・・じゃあ、今から何かするか？」

映司「そうだなあ・・・ゲスト呼ぼうか！」

アंक「お前・・・当てはあるのか？」

映司「うん。3人いるよ」

アंक「3人？」

アंक「・・・なのはとフェイト、後はまだ登場してないが、はやてか？」

映司「おゝい、入って来ていいよ」

アंक「もうスタンバイさせてたのかよ・・・」

ガチャ

アंक「・・・」

映司「さっ！自己紹介して？」

シュテル「どうも、マテリアルS、星光の殲滅者ことシュテル・ザ・デストラクターです」

レヴィ「僕はマテリアルL！雷刃の襲撃者ことレヴィ・ザ・スラッシャーだよ！」

ディアーチェ「我はマテリアルD、闇統べる王ことロード・ディアーチェだ」

アंक「・・・おい、映司」

映司「なに？アंक」

アंक「どういう事だ？」

映司「何が？」

アंक「何でこの3人がいるのかって聞いてんだよ！！」

映司「ちよっ！？痛い！痛いって！アंक！」

シュテル「暴力はいけませんよ。アंक」

アंक「うるさい！お前は黙ってろ！！」

レヴィ「何怒ってるんだよアंक」

ディアーチェ「王の前で無礼な奴だ！静かにせんか！塵芥！」

アंक「お前等も黙ってろ！！おい！スタッフ！！どうなってんだよ！！おい！！」

映司「ああ！！アंक！落ち着けて！！」

アंकが落ち着くまでしばらくお待ち下さい

アंक「はあ・・・はあ・・・」

映司「何か・・・疲れた・・・」

シュテル「大丈夫ですか？映司」

レヴィ「アंकも何かわかんないけど、大丈夫？」

ディアーチェ「まったく、騒がしい奴等だ」

映司「さ、さて。じゃあ、アंकが知りたがってるシュテル達がいる理由を教えようか」

シュテル「しかし、それを話したらネタバレになってしまうのでは？」

映司「大丈夫だよ。一言で説明出来るから」

アंक「一言？」

レヴィ「じゃあ！一言！どつぞ！」

映司「友情の勝利！」

アंक「・・・」

シュテル「まあ、そうですね」

レヴィ「友情！努力！勝利！そう、僕、最強！」

シュテル「関係ありませんよ、レヴィ」

ディアーチェ「ふん、映司にしては的を射ているではないか。褒めて使わそう」

アंक「・・・ツツコム気にもならない」

映司「じゃあ、ここからは何かワイワイ話すんだけど、何か題材ある人」

アंक「どんだけ、適当なんだ・・・」

シュテル「まあ、10000アクセス突破なんて言っていますが、実際は10199アクセスですからね」

ディアーチエ「突破にも程があるな」

レヴィ「10000と10119だから・・・20119だ!」

シュテル「何故足したんですか?レヴィ」

レヴィ「あれ?間違ってる?」

アंक「間違いどころの話じゃない。何で足すんだ、引けよ」

レヴィ「10000・・・10119・・・はっ！」

映司「じゃあ、答えをどうぞ！」

レヴィ「救急車！」

シュテル「成長しましたね、レヴィ」

ディアーチェ「我は信じていたぞ、レヴィ」

レヴィ「えっへん！」

アंक「・・・レヴィが何で馬鹿なのかかった。コイツ等が甘やかしてるからだ」

映司「ま、まあ、引き算はちゃんと出来てるからいいんじゃないか？」

アंक「・・・はあ」

映司「じゃ、じゃあ！この小説について何か疑問に思ってる事とかある人ー！」

シュテル「はい」

映司「はい、シュテル！」

シュテル「未来にいるラトさん達はいつ出てくるんですか？」

映司「えーっと・・・いつからだっけ？」

アंक「A・S編からだ」

レヴィ「僕等が出る1個前のお話だね」

ディアーチェ「私のオリジナルが出る物語りだな」

シュテル「何故そんなに遅いのですか？」

映司「俺達が一旦未来に帰らないといけないでしょ？そうすると、無印編には出せないんだよ」

アंक「まあ、留守番を引き受けたんだ。自業自得だ」

映司「ラト達が聞いたら怒るだろうなあ」

レヴィ「ねえ！ねえ！僕も質問！」

映司「何？レヴィ」

レヴィ「あの黒いローブの男って何者なの？」

シュテル「レヴィ、それは聞いてはいけませんよ」

レヴィ「え？そうなの？」

映司「それは、これからのお話でわかっていく事だから、ね？」

レヴィ「うん！わかった！」

ディアーチエ「では、最後は我だな」

映司「何？ディアーチエ」

ディアーチエ「零次とは何者だ？」

映司「・・・」

シュテル「・・・」

レヴィ「・・・」

アंक「・・・KY王が（ボソツ）」

ディアーチエ「聞こえたぞ！アंकー！！」

シュテル「ディアーチエ、それは私達も気になってはいましたが、聞いてはいけませんよ」

レヴィ「しゃくしゃさん、映司と零次の名前何回も間違ってたもんね」

シュテル「噛みましたね」

レヴィ「噛んでないよ！」

シュテル「噛みましたよ」

映司「2回も指摘が来てたしね。感想って見るだけでビクビクしてたし……」

アंक「最初の感想で滅茶苦茶怒られたからなあ。ラト達を作った意味がわからないってな」

映司「ハーレムでも作る気なのか？とも言われたな」

シュテル「ボロクソ言われたんですね」

映司「うん、そうなんだよ。……カザリ達もちゃんと出す予定な

のに・・・」

アंक「・・・」

シュテル「・・・」

レヴィ「・・・」

ディアーチエ「・・・」

映司「・・・あ」

アंक「・・・馬鹿だろ、お前」

シュテル「馬鹿ですね」

レヴィ「アハハハ！お馬鹿だなあ！映司！」

ディアーチエ「我等に言っておきながら、お前がネタバレしてどうする！塵芥が！！」

映司「・・・ごめんなさい」

映司「じゃあ、最後はみんなが好きな仮面ライダーでも発表してもらおうかな」

シュテル「はい。ちゃんと考えてきました。それに高町なのは達からもちゃんと聞いてきましたよ」

映司「よし！偉いぞ！シュテル」

シュテル「そ、そんな事はありません。頭を撫でないで下さい／＼」

レヴィ「あゝ、シュテルが照れてる」

シュテル「なっ！？て、照れてなんていません！」

ディアーチェ「照れるな照れるな。お前は頭を撫でられるのが好きだからなあ」

シュテル「でい、ディアーチェもレヴィもからかわないで下さい！」

アंक「おい、さっさと始めるぞ」

シュテル「は、はい！」

レヴィ・ディアーチェ「チッ」

アंक「映司、お前が好きな仮面ライダーは何だ？」

映司「そうだなあ、俺は仮面ライダークウガかな？誰かの笑顔の為に戦えるのって凄いなと思うんだ」

アंक「俺は仮面ライダー王蛇だな。自分の欲望に素直な奴は好きだ」

映司「そんな事言って、龍騎の映画食い入るように見てたのは誰だよ」

アング「何か言ったか？」

映司「何も？シュテルは？どんな仮面ライダーが好き？」

シュテル「私は仮面ライダーディケイドですね。世界の破壊者から世界の守護者になったのを見て感動しました。私もあなりたいものです。高町なのは仮面ライダー555だそうです。『私も誰かの夢を護りたい』だそうです」

映司「ありがとう、シュテル。次はレヴィだよ」

レヴィ「僕が好きなのは仮面ライダー電王！イマジン達の決め台詞がすつごくカッコイイんだ！」

映司「レヴィは何が一番好きなの？」

レヴィ「俺！参上！！」

映司「モモタロスが好きなんだ。フェイトちゃんにもちゃんと聞いて来てくれた？」

レヴィ「うん！えーっと・・・仮面ライダーアギトだって！『誰かの居場所を護れるようにになりたい』んだって！」

映司「そっか、ありがとう、レヴィ。最後はディアーチエだ」

ディアーチエ「我が好きなのは仮面ライダーキバだ。運命の鎖を解き放ち、運命を変える王に我もなりたい！はやてが好きなのは仮面ライダーカブトらしい。何でも、『例え、この世の全てが敵でも、家族を護れるようにになりたい』とか言っていたな」

映司「みんな好きな仮面ライダーは違うなあ。でも、理由がしっかりとしてるね」

アंक「9歳とは思えない思考をしてるからな。アイツ等、年齢偽ってるんじゃないか？」

映司「俺もたまに思うよ。ホントに9歳かなって」

シュテル「女の子は背伸びをするものなんですよ」

映司「そうなの？」

シュテル「はい。ね？レヴィ、ディアーチエ」

レヴィ「うん！僕も早く大人になりたい！」

ディアーチエ「私も早く大人になりたいものだ」

映司「・・・でも、大人になったら遊べなくなるよ？」

レヴィ「やっぱり子供が1番だね！」

ディアーチエ「何をやっても保護者のせいに来るからな！」

シュテル「レヴィ・・・ディアーチエ・・・」

アंक「言う相手を間違えたな、シュテル」

シュテル「・・・はい」

映司「・・・そ、それじゃあ、そろそろ終わるつか」

アंक「そうだな。もう十分だろ」

レヴィ「次はいつやるの？」

映司「そうだなあ・・・次は25000アクセスくらいでやろうか。それが無印編が終わって、A・S編が始まる前くらいかな。予告も含めて」

シュテル「まだまだ先の話ですね」

レヴィ「それまで暇だね」

ディアーチエ「読者次第か、作者次第だな。気長に待つとしよう」

映司「それでは、みなさん！」

「「「また、お会いしましょうー！」」「」」

アंक「ああ・・・疲れた・・・」

映司「おい、アंक！ちゃんと挨拶しろよ！」

アंक「うるさい！もう疲れたんだよ！」

レヴィ「みんなー！またねー！」

PV10000アクセス突破記念（後書き）

・・・感想とかがくれば、怖いけど嬉しいです

第5話『喧嘩と心配とヤミの卵』（前書き）

C o u n t T h e M e d a l s !

現在、オーズが使用したメダルは？

『タカメダル』×3

『クジャクメダル』×3

『トラメダル』×1

『チーターメダル』×1

『クワガタメダル』×1

『カマキリメダル』×1

『バツタメダル』×1

『ウナギメダル』×1

第5話『喧嘩と心配とヤミーの卵』

魔法少女リリカルなのは

～仮面の戦士～

前回までのハイライト――

何者かの手により、800年の眠りからオーズとグリードが目覚めた

オーズに変身のする火野映司はグリードのアンクと共にクイント・ナカジマを救う

その後、クイントを抹殺しようと奇襲を掛けて来たロボットと戦い、他のグリード4人と合流した

そして、通りすがりの仮面ライダー、門矢士に導かれ、ジュエルシードが散らばったとある世界にやって来た

その世界で映司はジュエルシードを探すフェイト・テストロッサとその使い魔・アルフに出逢った

その後、ジュエルシードを集めるもう一人の少女・高町なのはとユ

ーノ・スクライアとも出逢った

そして、この世界に現れたヤミーと映司達は遭遇する

そのヤミーはジュエルシードで強化されていた

オーズはアंकの作戦とフェイト達の助けにより、これを撃破した

第5話『喧嘩と心配とヤミーの卵』

くフェイトの自宅く

海鳴温泉から帰って来てから既に2日が経っていた

今日も今日とて、映司は朝食の用意をしていた

「・・・またドックフード缶、アルフちゃんだな」

映司は冷蔵庫を開けて食材を取り出そうとしたところで、アルフが内緒で買ったドックフード缶を発見した

「内緒で買うならもつと見つからない所に隠せばいいのに・・・」

そう考え、映司は取り合えずアンクに見つからない様に冷蔵庫の奥にしまった

これをアンクが見つけると、またアルフと喧嘩を始めるからだ

映司はドッグフード缶を隠した後、手を洗って調理を始めた

「おい、映司。アイスが無いぞ」

いつの間にかやって来たアンクが冷蔵庫の中にアイスが無いと映司に訴える

「自分で買って来いよ。それに最近食べ過ぎだぞ、アンク」

「俺達の名前はグリード、欲望だ。欲しがらなくてどうする？」

「ドヤ顔で言っても無い物は無いぞ。欲しいなら自分で買って来い」

映司はアंकにそう言っ て調理を続ける

「・・・チツ、飯が出来るまでには帰る」

そう言っ て、アंकは1000円札を持って出て行っ た

「・・・アイツも成長したなあ」

そんなアंकを見て映司は嬉しそうな顔をしていた

その日の朝食の雰囲気はいつもと違っ たものだった

はたから見れば、いつもと変わらない光景かもしれな

アルフが物凄い勢いで朝食を食べ、アंकがメンド臭そうに食べ、フエイトが黙って食べている

しかし、この2日間、映司達は温泉に行く前とは違うところがあることに気付いていた

「・・・はあ」

そう、フエイトに元気が無いのだ

ちゃんとご飯は食べているが、遅く、溜息ばかり付いている

アंकとアルフは既に食べ終え、リビングでゴロゴロしている

「・・・ごちそうさま」

食べ終わるとフエイトは食器を映司に渡し、溜息をつきながらリビングのソファーにもたれた

「・・・」

「「・・・」」

「・・・はあ」

「「・・・」」

アंकとアルフは無言で立ち上がり、食器を片付けている映司の元に向かった

「おい、映司。あれを何とかしろ！見ててイライラするんだよ！」

「何とかしておくれよ、映司！あたしももう限界だよ！」

小さな声で映司に訴えるアंकとアルフ

「・・・まあ、元気が無いのはわかってるけど・・・。じゃあ、聞いてみるよ」

そう言って、映司はキッチンに食器を持って行き、洗い始める

それを見たフェイトもキッチンに向かい、布巾を手にした

映司が洗い終えた食器を拭いて仕舞うのがフェイトの役割になったのだ

アंकとアルフは自称『食べる係り』らしい

「フェイトちゃん、どうしたの？温泉から帰って来てからずっと元氣無いけど、アंकもアルフも心配してるよ？」

そう言うのと、向こうから「俺は心配してない！イライラしてんだよ！」という声が聞こえて来たが映司は軽くスルーしてフェイトの返事を待つ

「そ、そうかな？」

「そうだよ。もしかして、なのはちゃんの事が気になってるの？」

フェイトは誤魔化そうとしたが、嘘に向かない人間なのですぐにバレた

「う、うん」

フェイトは食器を拭く手を止めて、正直に頷いた

「そっか」

映司は食器を洗いながら言う

「・・・何であの子は私にあんな事を言ってくれたんだろう？初めて会った時、酷い事したのに・・・」

フェイトは俯きながら映司に訊ねる

「うん・・・。フェイトちゃんと友達になりたいんじゃないかな？」

「えっ!？」

映司の答えに、フェイトは凄く驚いた

「そんなに驚く事かな？自分と同じ様に魔導師で、ジュエルシードを集めてるんだよ？相手の事をもっと知って、友達になりたいと思うのって普通じゃないかな？」

「そ、そうなのかな・・・わからないよ・・・」

「・・・まあ、後悔しないようにしないとね。後悔した時には遅いから」

映司はそう言ってフェイトにリビングに行ってて良いよと伝えてリビングに行かせる

フェイトがリビングに行くと・・・

「・・・ほら」

「え？何？アंक」

アंकがなんと、フェイトにアイスを差し出した！

「食つとけ、何かあった時動けなかったら話にならないからなあ」

そう言っていつもの赤い布を敷いたソファーに座る

「珍しいね、アンクが人にアイスを上げるなんて」

アルフがニヤニヤしながらアンクに言う

「うるさい。犬っころは冷蔵庫に隠したドックフード缶でも食ってる」

「な、何でそのことを！？それとあたしは狼だ！！」

内緒で買ったはずだったが、冷蔵庫に堂々と置いていけばバレるであろっ

どうやら、映司が見つける前にアンクが見つけてしまった様だ

「・・・ふふっ、ありがとう。アンク、アルフ」

フェイトは喧嘩を始めた心配してくれていた2人を見て、アイスをかじった

「ねえねえ、アंक。オーズのメダルを見せてよ」

アルフがいきなりオーズのメダルを見せてくれと言い出した

「あ？」

「だって、いろんな種類あるでしょ？見せてよ」

アルフはアंकを揺さぶりながら言う

「・・・はあ、わかった。わかったから揺さぶるな」

アंकはアルフにデコピンをして離れさせ、グリード化させた腕からメダルを出す

「わあゝ、たくさんあるんだね」

アंकが出したメダルを見て、フェイトも興味を持ったのか見に来た

「あつ、タカにトラにバッタだ。いつも映司が使ってる奴だよね」

フェイトがいつも映司が使っている3枚のメダルを見つけて並べる

「・・・あれ？似た色のメダルが3枚あるよ？」

アルフがそう言って、3色ある青と灰のメダルを並べる

「あ、ホントだ。この3枚もそれぞれ入れたら、5組になるね」

さつき並べたタトバコンボのメダルをそれぞれの色の組に並べると

タカ・クジャク・コンドル

クワガタ・カマキリ・バッタ

ライオン・トラ・チーター

サイ・ゴリラ・ゾウ

シャチ・ウナギ・タコ

同じ色のメダルが3枚の5組になった

「グリードのメダルはそれぞれ3種類、3枚だ」

そう言っア Ank は緑色のメダルを3枚持つ

「うん。カマキリとバッタにクワガタだね」

「それがどうかしたのかい？」

アルフが首を傾げて、ア Ank に問う

「オーズが変身に使うのも3種類だよ。2人共」

首を傾げているフェイトとアルフに映司は教える

「・・・そっか！今までバラバラだったけど、同じ種類3枚で変身

出来るんだ！」

メダルを見たフェイトが閃いたように言う

「そういう事だ。『メダルのコンボ』、その意味。メダルの本当の力が見られるかもしれないぞ」

アंकは不適に笑って2人に言った

「本当の力？」

「まあ、とんでもない事になるのは確かだ。これからの戦いの中で、使う事になるかもしれないなあ」

アंकはメダルを仕舞いながら呟く

「と、とんでもない事って……。大丈夫なのかい？映司」

アルフは映司を心配するように言う

「うーん。まあ、凄く疲れるかな？」

映司は笑ってそう答えた

「・・・」

その笑顔を見て、フエイトは言い知れぬ不安に駆られたのだった

時刻は既に3時、おやつの間である

映司はアंकと共に夕食の買い物に来ていた

「・・・映司、また居場所はわからないがヤミーだ」

「えっ？また居場所がわからないのか？」

「ああ、このジメジメした気配は・・・シャルのヤミーだな」

「シャルのヤミー……、大量発生の危険ありか……」

映司は大根を選びながら苦笑いする

「笑ってる場合か、コンボは800年振りだ。お前、ただじゃ済まないかもしれないぞ」

「まあ、三つ子の魂百までって言うし、過去に出来たんだから大丈夫だって」

そう言って、アंकが持つカゴにどんどん食材を入れていく

「……お前が馬鹿でよかった」

そんな映司を見て、アंकは小さく呟いた

「もう買い忘れないよなあ、アंक」

「知るか。俺はアイスがあればそれでいい」

映司は袋の中を確認しながらアंकに言うが、アंकは知った事ではないといった様子だ

「おい、アंकく……あれ？あれって……なのはちゃん？」

「何やってんだ？アイツ」

そんな感じで家に帰っていると、公園のベンチに1人、座っているなのはを発見した

「……アंक、先に帰っててくれ。はい、アイスが入った袋」

「ああ、任せろ」

アイスと聞いてアंकは快く袋を受け取り、帰って行った

「さて……。何を黄昏てるのかな？」

映司は公園に入って、なのはに近付いて行った

なのはは公園で何故こんな事になってしまったのかを考えていた

何故友達のアリサ・バニングスと月村すずかと喧嘩してしまったのか・・・

そんな事、考えなくてもわかる事である

フェイトの事とジュエルシードの事を考えていたのだ

結果、何を言われても上の空、アリサ達が怒るのも無理は無い

「・・・」

なのはは膝の上に置いた手をぎゅっと握り締める

「なのはちゃん、どうしたの？」

「えっ？」

声を掛けられ、顔を上げるとそこにいたのは映司だった

「・・・映司さん・・・お久しぶりです・・・」

「久しぶり、元気だった？」

「・・・」

「・・・って聞くのは無理みたいだね。どうしたの？」

映司はなのはの隣に座って訊ねる

「ちょっと・・・友達と喧嘩しちゃって・・・」

「そうなんだ。・・・どうして喧嘩しちゃったの？」

「・・・」

映司が訊ねると、なのはは黙ってしまった

「・・・もしかして、フェイトちゃんとジュエルシードの事？」

「えっ！？な、何でわかるんですか！？」

なのはは映司にピタリと言い当てられた為、凄く驚いた

「あはは、なのはちゃんとフェイトちゃんって似てるんだよね。良い所も、悪い所も」

映司は笑ってなのはに言う

「わ、悪い所って？」

「1人で何でも背負い込む所とか誰かに甘えない所とかかな」

映司は夕陽を見て、笑いながら言う

「わ、私、そんな・・・」

「アंकの言い方で言うと・・・お前、何様のつもりだ？」

「ッ!？」

映司の変貌振りになのはは肩を震わせた

「お前がどれだけ凄い魔導師か知らないがなあ、人間1人が出来る事なんてたかがしれてんだよ」

「・・・」

なのはは映司の物言いにショックを受け、全身の力が抜ける感じがした

「で、結局1人で抱えきれなくなって他人に迷惑掛けてたらザマアないなあ」

何か、態度までアंक化してきている映司

どれだけ長い間に一緒にいたか、わかる瞬間である

「で、でも・・・」

「でももくそもあるか。お前の事情なんて、何も知らない人間には関係ないんだよ」

「あ・・・」

「そうだろう？何も言わずに察して欲しいなんて、これ以上の我が俣が何処にある？」

その『我が俣』という単語に、なのははまた肩を震わせた

「勝手に悩むなら勝手に悩め。だがな、それを周りに勘付かれるな。その悩んでますオーラを出すな。自分が話していないんだからなあ、自業自得だ」

「・・・そ、そうですね」

映司の言葉はなのはの心にグサリと刺さってえぐって来ていた

「・・・まっ、アंकならこう言うかな。でも、俺もそう思うよ。何も話さないで分かり合える事なんて、まず無いから。その様子だと、なのはちゃん、両親にも話してないんじゃない？」

「・・・」

図星だった、なのはは両親や兄姉にジュエルシードの事は話していない

それは、心配を掛けたくない、迷惑を掛けたくないと思ったからだった

「知ってる？親って、何も話してくれない方が心配するんだよ？」

映司は立ち上がって前に歩いて行く

「それに、なのはちゃんには頼れって怒ってくれる友達がいるんですよ？だったら、その子達に頼って上げれば良い。ユーノ君だっているんだから、頼れば良い。なのはちゃんはまだ小学3年生なんですよ？お母さんやお父さんにいっぱい甘えたっていいんだよ？」

そう言う映司が、一瞬だけ自分の兄と同じくらいの身長に見えた

なのは目を擦ってもう一度見ると、映司は元に戻っていた

「・・・映司さんって、お兄ちゃんみたいなの」

「そうかな？あ、ごめんね。アंकがどういふかなって考えながら言ったから、結構酷い事言ったよね」

「ううん。気にしないで下さい。全部当たってますから」

映司の言葉を聞いて、なのは首を横に振って言う

「・・・私、お母さん達に話してみます。信じてもらえるかわからないけど、もう心配掛けたくないから。それに、アリサちゃんやすずかちゃんとも仲直りしたいですから！」

なのははさっきまでとは打って変わって笑顔でそう言った

「そっか、頑張ってるね。なのはちゃん」

「はい！本当にありがとうございました！」

そう言つて、なのはは笑顔で去つて行つた

「・・・あとは、フエイトちゃんだな」

映司はそう呟いて、帰路につくのだつた

夕日が窓に差し込み、眩く感じる頃

映司が家に帰つて来て少し時間が経っていた

獣耳と尻尾をピクピクと動かしながらアルフは小腹空いた為、おやつを食べようとしていた

「アルフちゃん、それ本当に食べるの？」

映司はアルフが食しようとしているソレを見てから確認するかのよ
うに訊ねる

「ん？映司、アンタも食べたいのかい？」

そう言いながら、ドッグフードをチョコスナックのように差し出し
てくる

「え、えーっと・・・」

映司は差し出されたドッグフードを見る

チョコスナックのように見えなくはないが、ドッグフードはあくま
で犬の主食だ

「コレ、結構イケるからさ。映司も食べてみなって！」

そう言って、アルフは映司にドッグフードをずいずいと薦める

「やめとけ、映司。腹壊すぞ」

アंकがドックフードを受け取ろうとした映司の頭を張り倒して止めさせる

「そんなモン食うのは犬ところだけだ。人間が食って良いもんじゃない」

「あたしは狼だ！何回言えばわかるんだい！！」

「何回この話すればお前は自分が犬だと自覚するんだ？」

また、アंकとアルフが喧嘩を始めた

「・・・それにしても、出てこないな。フェイトちゃん」

映司は数十分前から開かずの扉と化しているフェイトの部屋の扉を見て呟く

「そう言えばそうだねえ。映司がご飯持って行った時はどんな感じだった？」

アルフはアंकとの喧嘩を中断して言う

「おおおお・・・」

結果、アंकはアルフが急に手を離れた為、後頭部を床に叩き付けた

「ベッドに寝転がって、何か考え事してたかな？」

映司は顎に手を当てて、思い出すように言う

「考え事？何だい？」

「知らないよ、そんなの。フェイトちゃんに直接聞いてみないと」

「じゃあ、映司！GO！」

アルフがフェイトの部屋を指差し、映司にGOサインを出す

「わかった、食器の回収のついでに聞いて来るよ」

そう言って、映司はフェイトの部屋に向かった

「行つてらっしゃーい」

そう言つて、アルフはソファーに寝転んだ

「人任せもいいところだな」

いつの間にか復活していたアंकがソファーに寝転びながら小さな声で呟いた

ノックをしてから「どうぞ」と声がしたので映司は部屋に入る

「フェイトちゃん、食器を片付けに来ただけど・・・」

映司は差し入れに渡した食事を見る

大した量ではなかったが、食事は殆ど手がつけられていなかった

「……殆ど残してゐ、おいしくなかった？」

映司は溜息を吐いてフェイトに訊ねる

「うん、そんな事ない、おいしかったよ。少し食べたから大丈夫」

フェイトはゆっくりと起き上がる

バリアジャケット姿ではあるが、マントは羽織っておらず、手袋も
はめていない グローブ

「アルフちゃんから聞いたよ。広域探索の魔法って、かなり体力を
使うんでしょ？」

「……うん」

映司の指摘にフェイトは頷いた

「だったら、ちゃんと食べて、力を蓄えておかないと」

映司はベッドに腰を掛けてフェイトに言う

「うん・・・わかってる・・・大丈夫だよ、私は元気だから」

フェイトは俯いてそう言う

「・・・大丈夫に見えないから言ってるんだけどなあ」

映司はそう言っで、フェイトを見る

「フェイトちゃんはこれからもジュエルシードを探すんだよね？」

「うん、母さんが待つてるから・・・」

映司に訊かれ、フェイトは即答する

「だったら、もっと俺達を頼ってよ」

「えっ？」

「俺もアंकもアルフちゃんも、みんなフェイトちゃんの傍にいるよ？もつと頼ってよ」

映司は笑いながらフェイトに言う

しかし、何故かフェイトにはその笑顔が悲しげに見えた

「・・・わかった。でも、もうちょっと頑張らせてくれないかな？」

「・・・うん、わかった。もう少ししたら晩御飯にするから、その後ジュエルシード探しに行こうね」

「うん」

フェイトの返事を聞くと、映司は食器を持って部屋から出た

「映司、どうだった？」

部屋から出てきた映司にアルフが心配そうに近寄ってくる

「大丈夫、何かあったら頼ってくれるって」

「本当かい！？映司！！」

アルフは何故か嬉しそうに飛び跳ねている

「どうしたんだ？お前」

そんなアルフを、アंकは怪しいものを見る目で見る

「だって！フェイトが自分から頼ってくれるって言ったんだよ！！」

「そっか、よかったね、アルフちゃん」

そう言って映司はキッチンに向かう

「あ、そうだ。アルフちゃん、1つ聞いてもいい？」

しかし、途中で思いついた様に立ち止まり、アルフの方を見る

「何だい？映司」

「フエイトちゃんのお母さんって、どんな人？」

「・・・」

アルフが急に顔を伏せた

拳を握るその手はぶるぶると震えている

よく見ると、全身も震えていた

それが『怒り』か『憎しみ』か、それとも『恐怖』なのかは映司と
アंकにはわからなかった

しかし、あまり良い感情を抱いていないという事だけはわかった

「・・・答えにくかったらいいよ。ごめんね、アルフちゃん」

「あ、ああ。こっちこそごめんよ」

そう言って、アルフはそそくさとリビングに向かった

「・・・アंक」

「ああ、どうも良い人間じゃあないみたいだなあ」

「・・・一度、会ってみる必要があるそうだな」

アंकはそう言っけリビングに向かった

「・・・」

映司もアंकに続いてリビングに向かった

海鳴市を夜の闇が包んだ頃――

とあるビルの屋上に映司達はいた

「大体、この辺りだと思うんだけど・・・」

「探すの大変そうだなあ・・・」

映司はビルの屋上から周囲及び主に下を見る

「これだけゴミゴミしてると探すのも一苦労だねえ」

アルフも映司同様に周囲及び下を見回しながら率直な感想を述べる

「フェイト、何か手はあるのか？もう一度探索するのか？」

アंकの言葉にフェイトは首を横に振る

「うっん、多少だけど強引な手を使っんだ」

「強引な手？」

映司はフェイトが何をするのかわからず、首を傾げる

「この辺り周辺に魔力流を打ち込んで強制発動させるんだ」

「ああ、それあたしがやるよ」

自分がやると、アルフが立候補した

「大丈夫？結構疲れるよ」

フェイトがアルフの身を気遣う

「あたしが誰の使い魔だと思ってるんだい？」

アルフは笑いながらそう言った

「じゃあ、お願い」

フェイトは自身の使い魔に任せる事にしたようだ

「アイツは何を始める気だ？」

「説明するより見た方が早いと思うよ」

フェイトはアंकにこれから起こる事を見る様に促した

「そんじゃあ！いくよ！！」

アルフの足下にオレンジ色の魔方陣を展開させる

「はぁああああ！！！！！」

そして、一筋の光を夜空に向けて撃ち込んだ

それにジュエルシードが反応して空が暗くなり、海では激しく雷鳴が轟いた

その頃――

なのはとユーノも同じく街に出てジュエルシードを探していた

「い、これは!?!」

別々に探してたユーノが街の異変に驚く

「こんな街中で強制発動!?!」

空を見上げてユーノは叫んだ

「くっ! 広域結界! 間に合え!?!」

ユーノの足下に緑色の魔法陣が展開された

「ッ!？」

一方のなのはも街の異変に気付いていた

満月が出ていたのに、雲が急に出て隠し始めた

その直後に雷が鳴り始めたが、雨が降る兆候はない

ここにはいないユーノが結界を張ったのだろつとなのはは推測した

「レイジングハート!お願い!!」

「stand by ready set up」

なのはは桜色の光に包まれ、バリアジャケットを纏った

人工的に発生した異常気象は収まり、後には海鳴市に青色の光が天に向かっていくという光景だった

その天に昇る光が何なのかは、なのはにはわかった

そして、この突然の異常気象を引き起こす原因となる魔力を打ち込んだ者にも目星がついていた

「見つけた！」

天に向かって放たれている一筋の青い光

それがジュエルシードだという事をフェイトは確信していた

そもそもこのような状況を起こさせるために、天に向かって魔力を放ったのだ

「けど、あっちも近くにいるみたいだよ」

アルフが言った直後、ユーノの広域結界で世界の色が変わった

「早く片付けよう。バルディッシュ」

「Sealing Form Setup」

バルディッシュをデバイスモードからシーリングモードへと形態を変化し、構えた

一方、なのはは何処か別の場所で結界を展開しているユーノからの念話を受けていた

（なのは、発動したジュエルシードは見える？）

（うん、すぐ近くだよ）

本当に近くなので、なのはは即答した

（あの子達もすぐに近くにいるんだ。あの子達よりも先に封印して！）

（わかった！）

念話の回線はどちらが先というわけでもなく切れた

「Sealing Mode Setup」

なのはの意思を汲み取ったのかレイジングハートがシーリングモードへと形態を変えていく

「リリカルマジカル！」

レイジングハートに桜色の光が集束される

「ジュエルシード、シリアル19！」

バルディッシュにも金色の光が集束される

「・・・ッ！？待て！！」

アंकはジュエルシードを見て何かに気付き、フェイトを止めようとしたが、既に遅かった

「封印!!」

二人の少女が叫ぶと同時に、金色と桜色の光がジュエルシードにぶつかった

ジュエルシードは浮揚してはいるが、それ以上の動きはない

やがて2つの光は消失し、そこに残っていたのは浮揚しているのは
淡い光を放ったジュエルシード1つだけだった

なのはとフェイトは急いでジュエルシードのある場所に向かった

「映司!今すぐアイツ等を止める!」

そう言って、アंकは映司にメダルを投げる

映司は驚きながらそれを受け取った

「アंक?一体どうしたんだい?」

映司に大きな声で言うアंकにアルフは首を傾げる

「・・・まさか!？」

「早くしろ!」

「うん!」

映司は腰にドライバーを装着し、メダルを入れてスキャナーを滑らせた

「変身!」

《TAKA!》《KUJYAKU!》《BATTLE!》

円形の様々な色の力の紋章が映司の周りを踊る

そして、映司の胸に紋章が刻まれ、力が宿った

映司はオーズ・タカジャバに変身し、フェイトを追った

「フェイトちゃん！」

「・・・高町、なのは」

フェイトとなのははジュエルシードの傍で再会していた

「・・・今回も勝負だね」

そう言っとなのはとフェイトはまた戦闘を始める

「Scythe form」

フェイトはバルディッシュを鎌の形に変形させた

「！！！」

なのはもレイジングハートを構える

電灯から離れ、宙に浮かんで一定の距離をとるようにして下がる

そして、構えてなのはに向かって突っ込んでいった

「Filler Fin」

なのはの両足に桜色の双翼を展開させ、フェイトと同じように宙へと舞台を移した

「Flash Move」

フェイトがバルディッシュを振りかぶって、なのはの背後に回りこむ

「あ!」

なのはより先にレイジングハートが反応して、フェイトの背後に回りこんだ

「!？」

フェイトは一瞬だが、驚愕するがすぐに次の攻撃に転じるための策を頭の中で練った

「Divine Shooter」

レイジングハートからデイバインシューターが放たれる

「Photon Lancer」

周囲に生成したフォトンスフィアからフォトンランサーを発射し、デイバインシューターを打ち消した

フェイトはその後、すぐにジュエルシールドに向かった

「あ！ズルい！」

なのはもジュエルシールドに向かった

そして、ジュエルシールドの前で2人の持つデバイスがぶつかり合った

「「あつ!?!」」

そのせいで互いのデバイスにヒビが入ってしまった

しかし、2人にデバイスを気にしている暇は無かった

「「ッ!?!」」

何故なら、ジュエルシールドが強烈な光を放ったからだ

先程までの淡い光を大きく上回る光が忽ち広がって行く

「フェイトちゃん!なのはちゃん!」

その光から2人を救い出すようにオーズはジュエルシールドから引き離れた

そして、ジュエルシールドから遠く離れた場所に2人を降ろした

「大丈夫?2人共、怪我は無い?」

オーズは2人を並ばせて、怪我をしていないか体を調べた

「だ、大丈夫だよ、映司。でも、バルディッシュが・・・」

「私も、大丈夫ですけど、レイジングハートが・・・」

2人は傷付いてしまった自身の相棒を悲しい瞳で見つめる

「戻って、バルディッシュ」

「Yes sir」

「レイジングハートも戻っていいよ」

「All Right」

2人はデバイスをスタンバイモードに戻した

「ねえ、映司。あれは何？」

「いつものジュエルシードと違うよね」

フェイトとなのははいつもと違うジュエルシードを見上げて言う

光は、今も大きく膨らんでいつている

その中には、大量の水色の玉が存在していた

「あれは・・・ヤミーの卵だよ。ジュエルシードの淡い光だと思ってたのはヤミーの卵だったんだ」

オーズは空で輝きを増しているジュエルシードを仰ぎ見て2人に言い放った

第5話『喧嘩と心配とヤミの卵』（後書き）

C o u n t T h e M e d a l s !

現在、オーズが使用したメダルは？

『タカメダル』×3

『クジャクメダル』×3

『トラメダル』×1

『チーターメダル』×1

『クワガタメダル』×1

『カマキリメダル』×1

『バツタメダル』×1

『ウナギメダル』×1

第6話『約束と思い出と分身コンボ』（前書き）

C o u n t T h e M e d a l s !

現在、オーズが使用したメダルは？

『タカメダル』×3

『クジャクメダル』×3

『トラメダル』×1

『チーターメダル』×1

『クワガタメダル』×1

『カマキリメダル』×1

『バツタメダル』×1

『ウナギメダル』×1

第6話『約束と思い出と分身コンボ』

魔法少女リリカルなのは

～仮面の戦士～

前回の3つの出来事――

1つ、アंकと映司はオーズのコンボについて、フェイトとアルフに話す

2つ、映司はなのはとフェイトと話し、2人は似た者同士だと知る

そして3つ、なのはとフェイトの魔力により、ジュエルシードが暴走し、ヤミーの卵が大量発生した

第6話『約束と絆と分身コンボ』

ジュエルシードの暴走により、ヤミーの卵が無限に生成されているのを少し離れて見ている者がいた

そう、ヤミーを作り出している黒いローブを着た男である

「ほう。まさか、こんな事になるとは・・・嬉しい誤算だ」

男がそう言っている間にも、ヤミーの卵は次々と増えていつている

「さあ、どうする？欲望の王よ」

そう言い残し、男は闇に消えた

オーズの話を聞いて、なのはとフェイトは驚愕していた

自分達の上空では今、ジュエルシードが輝きを放っている

その光の中には、いくつもの水色の玉が生成されていた

そのせいで、ジュエルシードは卵に隠されて見えなくなってしまう
ている

「や、ヤミーの卵って・・・あんなに沢山あるよ!？」

「じゃ、じゃあ、この前みたいなのがあんなに生まれるんですか！
」?

フェイトとなのはは驚愕して空にあるジュエルシードを見つめる

「ジュエルシードを利用してるから、無限に生まれてくるかもしれない・・・」

オーズがそう言った次の瞬間、卵が一斉に孵った

空から大量のピラニアヤミーが降って来る

その光景を見て、なのはとフェイトはどうすればいいのかわからなくなっ
てしまった

「・・・とにかく、何とかしないと!」

オーズはそう言って空に舞い上がり、ピラニアヤミの波に向かって飛んだ

「はあっ!!」

タジャスピナーからエネルギー弾を放ち、ピラニアヤミの海に穴を開ける

しかし、その穴はすぐに他のヤミによって塞がれる

「やっぱり、元を断たないとダメか」

そう言って、オーズはドライバーからメダルを外し、タジャスピナーに入れた

そして、スキヤナーをタジャスピナーに当て、スキャンした

《TAKA!KUJYAKU!BATT!GIN!GIN!GIN!GIN!GIN!GIN!GIGASCAN!!》

タジャスピナーの中のセルメダルがギガスキャンされ、炎の渦が発生する

「はあああ・・・セイヤアアアア！！」

オーズはジュエルシードに向かって3枚それぞれのコアメダルと7枚のセルメダルを模したエネルギー弾を回転させながら放った

しかし、エネルギー弾はジュエルシードに届く前にピラニアヤミーによって止められてしまった

「ヤミーが多過ぎる・・・うわっ!?!」

オーズが空を飛んでいるにも関わらず、ピラニアヤミーはその数を活かして大きな波を作り、オーズに襲い掛かった

「何やってんだ!! 映司!!」

ところが、その波はオーズに届く前に圧倒的な炎によって綺麗に消失された

「アंक！」

炎が飛んで来た方を見ると、翼を広げたアंकがそこにいた

「コアをこいつに変える！」

そう叫んでアंकは『クワガタ・コア』を投げ渡す

「よし！」

オーズは地面に降り、『タカ・コア』を『クワガタ・コア』に換え、スキャナーを滑らせた

キーン、キーン、キイインッ！

《KUWAGATA!》《KUJYAKU!》《BATT!》

「はあ!!」

オーズはガタジャバに変わり、クワガタヘッドから雷を放ってピラニアミーを殲滅する

しかし――

「ダメだ、キリがない！うわっ！！」

無数のピラニアヤミーが一気に消滅するが、それを上回る増殖力でオーズに襲い掛かった

「映司！」

アंकは火炎弾を数発放ち、オーズに襲い掛かろうとしたピラニアヤミーを消滅させる

「ダメか……。映司！一旦引くぞ！」

アंकは先程消した分がもう生み出されているのを見てオーズに言う

「わかった！」

アंकと策を練る為、一旦フェイト達の所に戻るのだった

オーズがフェイトとなのはを避難させた場所

「なのは！」

「フェイト！」

2人の元に、それぞれの相棒が駆けつけていた

「ユーノ君！」

「アルフ！」

2人は相棒の姿を見て、駆け寄る

「大丈夫かい？」

「うん。でも、映司が・・・」

フェイトは大量のピラニアミーを駆除しているオーズを心配そうに見つめて言う

「あッ！映司！！」

「映司さん！！」

オーズがピラニアミーに吞まれそうになったのを見てフェイトとなのはは声を荒げる

しかし次の瞬間、ピラニアミーの波が巨大な炎によって消し去られたのを見て驚いたが、オーズが無事なのを見て2人は少し安心した

「今の・・・もしかして・・・」

「うん。多分、アंकだと思うよ。いつも炎を使ってたからね」

アルフは巨大な炎を見てアंकが放ったと推測した

「何て強力な炎なんだ・・・」

ユーノはその炎を見て呆然としていた

「・・・あ、戻って来た」

フェイトはピラニアヤミーの海から離れて来るオーズとアंकを見た
つけた

4人は近くに降り立った2人を見て駆け寄る

「映司！大丈夫！？」

「怪我とかしてませんか！？」

フェイトとなのはが心配そうにオーズに訊ねる

「え？あ、うん。大丈夫だよ。それより・・・」

オーズは振り返ってピラニアヤミーの海を見る

「どうしよう、映司・・・バルディッシュはしばらく使えないし・・・あんなに沢山いたら・・・」

「私も、レイジングハートはしばらく使えません・・・」

フェイトとなのはが俯いてオーズに言う

「映司・・・」

「映司さん・・・」

アルフとユーノも心配そうな顔をしてオーズを見る

「・・・よし、アंक」

映司は何かを決意してアंकを見た

「どうやら、コンボしかないみたいだな」

そう言って、アंकは『カマキリ・コア』を出す

「だがお前、本当に大丈夫なのか？」

「大丈夫じゃなくても、やるしかないでしょ」

映司はアंकからメダルを受け取り、歩いて行く

そして、なのはとフェイトの前に立った

「映司、何をする気なの？」

「何か手があるんですか？」

「うん。危ないから、みんなさがっててね」

オーズはそう言ってなのはとフェイトの頭を撫でた後、大量のピラニアミーを見た

そして、もう少しみんなから離れてから、『クジャク・コア』を『カマキリ・コア』に換え、オースキャナーを滑らせた

キイン、キイン、キイインッ！

《KUWAGATA!》《KAMAKIRI!》《BATT!》

《GATAGATAKIRIBBA!GATAKIRI
BA!》

いつもと違う歌が流れ、光が収まった時、そこにいたオーズの姿は
変っていた

黒のボディ、胸部の中心にあるサークルに刻まれた『鋏形』『蠃螂』
『飛蝗』

『鋏形の角』が備わった緑の顔

『蠃螂の鎌』が装備された緑の腕

『飛蝗の脚』が備わった緑の脚

全身が緑に揃った『ガタキリバコンボ』にオーズは変わったのだった

「うおおおおおおお！！！！」

緑の衝撃波を放ち、オーズは溢れんばかりの力を解き放つ様に咆哮を上げた

「な、何て力だ・・・！」

「か、身体の震えが止まらないよ、フェイト」

ユーノがオーズの力を感じ取り、驚愕している

そして、アルフはその巨大な力に野生の本能が反応し、震えていた

「す、凄い・・・」

「凄過ぎるよ・・・」

フェイトとなのはも呆然とオーズを見ていた

「何言ってる？とんでもないのはここからだぞ？」

そんな4人に、アंकは不適な笑みを浮かべて言い放った

「おおおお！！ハアアア！！」

オーズは咆哮を止めて思いきり腕を下ろす

そして、ピラニアヤミーの海に向かって走り出した

オーズは波のようになってくるピラニアヤミーに向かって走って行く

「はあああああ！！！！！！」

そして、次の瞬間にオーズが総勢50人に分身した

オーズの波とピラニアヤミーの波がぶつかった

「ふっ！はっ！とりゃっ！はあっ！…！」

「はあ！でりゃ！はっ！はあ！でりゃあ！…！」

「はっ！はあああ！はっ！はっ！セイヤー！…！」

「ふっ！はっ！とりゃっ！はあっ！…！」

「はあ！おりゃ！はっ！やあっ！でりゃあ！…！」

「はっ！はあああ！せいっ！はっ！セイヤー！…！」

「ふっ！はっ！とりゃっ！はあっ！…！」

「はあ！でりゃ！はっ！はあ！でりゃあ！…！」

「はっ！はあああ！はっ！はっ！セイヤー！…！」

「ふっ！はっ！とりゃっ！はあっ！…！」

「はぁ！おりゃー！はっー！やぁっー！でりゃあー！..」

「はっー！はぁぁぁー！せいっー！はっー！セイヤー！..」

「ふっー！はっー！とりゃっー！はぁっー！..」

「はぁー！でりゃー！はっー！はぁー！でりゃあー！..」

「はっー！はぁぁぁー！はっー！はっー！セイヤー！..」

「ふっー！はっー！とりゃっー！はぁっー！..」

「はぁー！おりゃー！はっー！やぁっー！でりゃあー！..」

「はっー！はぁぁぁー！せいっー！はっー！セイヤー！..」

「ふっー！はっー！とりゃっー！はぁっー！..」

「はぁー！でりゃー！はっー！はぁー！でりゃあー！..」

オーズはピラニアヤミーをクワガタヘッドから放った雷で消滅させ、
カマキリソードで斬り裂き、バッタレッグで蹴り、踏み潰していく

「いたっ！このっ！」

「痛い痛い！！」

「いだだだだ！？」

「いてっ！このっ！」

「噛むな噛むな！！」

「いでででで！？」

「いたっ！このっ！」

「痛い痛い！！」

「いだだだだ!?!」

「いてっ!このっ!」

「噛むな噛むな!?!」

「いででで!?!」

ピラニアヤミーも負けるものとオーズ達の身体があっちこちに
噛み付く

しかし、力はオーズの方が圧倒的だった

ピラニアヤミーはジュエルシードに集まり、巨大な1匹のピラニア
ヤミーになり、オーズに光線を放とうとチャージを始める

それを見たオーズは一斉にメダルをもう一度スキャンする

キーン、キーン、キイイーンッ!

《Scanning Charge!》

《《Scanning Charge!》《》

《《Scanning Charge!》《》

《《Scanning Charge!》《》

全員がスキャニングチャージすると、巨大ピラニアヤミィはオーズ
に向かって光線を放った

「セイヤアアアアー! ! ! ! !」

「セイヤアアアアー! ! ! ! !」

「セイヤアアアアー! ! ! ! !」

「セイヤアアアアー! ! ! ! !」

しかし、その爆発をもろともせずに、オーズ達はヤミィに向かって
一斉に蹴りを放った

『ガタキリバコンボ』の必殺技『ガタキリバキック』である

巨大ピラニアヤミーの中に入り込んだオーズ達は内側からもピラニアヤミーを壊していく

そして、ジュエルシードを発見し、掴み取り、体内から飛び出した

すると、ピラニアヤミーは大爆発を起こし、大量のメダルをばら撒く

オーズは1人に戻り、その手にジュエルシードを握って地面に着地した

オーズの戦いをフェイト達は呆然と見ていた

50人に増え、あれだけいたピラニアヤミーを全て倒してしまった

最初は幻術かと誰もが思ったが、その全てが実体を持って戦っていた

もう、この場にいるアंकを除いた全員が理解不能だった

そして、ピラニアミーを倒したオーズが地面に着地する

「はぁ・・・はぁ・・・」

オーズがコンボの反動に膝をついてしまった

そして、変身が解除されて地面に倒れた

「「え、映司!?!」」

「「映司さん!?!」」

「チツ・・・」

その光景に驚いた5人は駆け寄った

「おい、映司!しっかりしろ!」

「映司！しっかりして！」

「映司！！」

「映司さん！大丈夫ですか！」

「しっかりして下さい！映司さん！」

アंकは映司の体を抱え、他の4人が側に寄り映司を覗き込む

「あ、あはは・・・ちよつと・・・疲れた・・・」

そう言って、映司は目を閉じて気絶した

「「映司！！」」

「「映司さん！！」」

4人は映司の名を同時に叫んだ

「フェイト、アルフ、さっさと運ぶぞ」

アंकは映司を抱え、翼を広げて空に舞い上がった

「う、うん！」

「急ごう！」

フェイトとアルフもそれに続こうとする

「ふえ、フェイトちゃん！」

「・・・なに？」

なのはに呼び止められてフェイトは振り返る

「え、映司さん、大丈夫なの？」

「・・・きつと大丈夫。映司は強いから」

フェイトはなのはの心配そうな顔を見て言い、先に行ったアंकとアルフを追い掛けた

「フェイトの自宅」

家に戻った3人は映司をベッドに寝かせ、看病していた

まあ、実質やっているのはフェイトとアルフだが・・・

「これでよしと・・・」

アルフは濡れたタオルを映司のおでこに乗せて小さく呟く

「映司・・・」

フェイトはそっと映司の手に触れた

「……ごめんなさい……私のせいで……」

「フェイト……」

「私が、私が映司を巻き込んだから……」

フェイトは悲しげに顔を俯かせながら映司に何度も謝った

「私が巻き込んだのに、私は何も出来なかった……ごめんね、映司……本当にごめんなさい……」

隣に座ってるアルフは優しくフェイトの肩を抱いてやる

その時――

「……謝る必要なんて……無いよ……フェイトちゃん」

映司の声がした

フェイトは顔を上げて映司を見る

映司はいつの間にか目を覚まし、フェイト達を見ていた

「映司！」

「気がついたのかい！？」

「うん」

ゆっくりと映司は上半身を起こした

「映司・・・本当にごめんね。私のせいで・・・映司を危ない目に
あわせて・・・」

フェイトはまた悲しそうな表情で顔を俯かせる

「そんな事ないよ、顔上げて？フェイトちゃん」

映司の優しい声を聞いて、フェイトは顔を上げる

「前にも言ったよね？俺達もジュエルシードを集めないといけない
つて。それに、今回は相手が多かったから疲れたただだよ。ヤミー
のせいだから、フェイトちゃんのせいじゃないよ」

「映司・・・」

フェイトは感極まって涙を流しそうになった

「・・・あ、でもやっぱりフェイトちゃんのせいかもしれないなあ」

「えっ！？そ、そんな・・・」

映司の突然の発言にフェイトは驚いた

「フェイトちゃんがいつも1人で何でも抱え込んで頼ってくれな
いから、倒れちゃったのかもしれないなあ」

映司は意地の悪い笑みを浮かべながら言う

「・・・ッ！そ、そうだよ！いつもフェイトがあたし達を頼って
くれないから、こんな事になったんだよ！」

映司の意図に気付き、アルフも乗った

「そ、そうなの!?で、でも・・・」

「そうか、フェイトちゃんはまた俺が倒れてもいいんだ」

「フェイトはそんな事思ってるのかい？」

「ええ!?わ、私、そんな事思っていないよ!?ねえ!!」

フェイトはアタフタしながらそんな事思っていないと必死に言う

「わ、私ホントに思っ——」

フェイトがオロオロしながら必死に2人に弁解していると・・・

「うるさい!!」

「ッ!?!」

誰かがフェイトの頭に拳骨を叩き込んだ

フェイトは両手で頭を押さえて痛みに耐えている

「お、おい・・・やりすぎだぞ、アंक」

「あ、アंक！アంత何やってんだい！？」

アルフはアंकに飛び掛ろうとした

「おすわり！！」

「わんっ！・・・ハッ！？」

アंकのあまりの気迫にアルフは思わず、おすわりをしてしまった

「フェイト、お前は今日の映司を見てどう思った？」

「えっ？」

「何でもいい。ぶっ倒れた馬鹿映司を見てどう思ったんだ？」

「・・・1人で・・・無茶しないで欲しいと思った・・・」

フェイトは顔を俯かせてアंकに答えた

その答えを聞いて映司とアルフは優しい表情を浮かべてフェイトを見る

「それは、俺達がいつも思ってる事だとコイツ等は言いたいらしいぞ」

アंकの話の聞いて、フェイトは映司とアルフを見る

「夕方に言ったよね？もっと頼って欲しいって」

「・・・うん」

「フェイトちゃんはまだ子供なんだよ？もっと周りを頼って、甘えて良いんだよ」

「・・・」

フェイトは映司の話を聞いてアルフとアンの顔を見る

「うん」

「ふん」

アルフは頷き、アンは顔を逸らしたが頷いた

「ね？」

「・・・うん。ありがとう、映司、アルフ、アン」

フェイトは目を潤ませながら3人にお礼を言った

「それじゃあ、もう寝ようか。もう随分遅い時間だし」

映司は部屋に掛けられた時計を見て言う

「どっかの誰かさんがぶっ倒れたからなあ。いい迷惑だ」

そう言つて、アंकは部屋から出て行つた

「あんな言い方しなくてもいいのにね、アंक」

フェイトは出て行つたアंकを見て言う

「素直じゃないんだよ、アंकは。でも、心配掛けたみたいだな」

映司はアंकが出て行つた扉を見て言う

「え？どういう事だい？いつものアंकと変わらなかったけど？」

映司の発言にアルフは首を傾げた

「アイス、食べてなかったでしょ？」

「・・・あ、ホントだ。いつもなら食べてるのに、さっきは食べて

なかった」

フェイトは確かにアंकがアイスを食べていなかった事に気付いた

「アंकはアंकなりに心配してくれてたんだよ」

開けっ放しにされた部屋のドアを見て、映司は呟いた

「そっかそっか。アंकも素直じゃないねえ」

アルフは面白い事がかったという笑みを浮かべている

「それじゃあフェイト、あたし達も寝よう。明日はアンタのお母さんに報告に行くんだし」

「うん、そうだね。おやすみ、映司」

「おやすみ、フェイトちゃん、アルフちゃん」

映司の返事を聞いてフェイトとアルフは部屋を出て行った

「・・・フェイトちゃんのお母さん、か」

映司はさっきまでとは打って変わって深刻な表情を浮かべる

「・・・会えば『あの傷』について、ちゃんと説明してくれるのかな？」

その言葉にはあからさまに怒りが籠っていた

映司は寝巻きに着替えて、寝る準備をしていた

コンボのせいで、未だに身体はダルイが、初めて使った時まではなかったようだ

「初めて使った時は、1日中寝てたからなあ」

そう呟いて、映司はベッドに倒れ込む

「・・・明日は大変だろうな」

映司が明日に想いを馳せながら寝ようとした時、部屋のドアを誰かがノックした

「ん？どうぞ」

映司がそう言うとドアが開き、フェイトとアルフが入って来た

フェイトは大きな枕を抱き締めるように持っていて、アルフは何かブツブツ呟いている

「・・・映司」

「あれ？どうしたの？2人共。眠れないの？」

「あの・・・その・・・」

フェイトは顔を赤くしながら、胸の前で手をモジモジさせてる

映司はそんなフェイトを見て、首を傾げた

「えっと・・・今日は一緒に・・・寝てくれないかな？」

「・・・え？」

「え、映司１人で寝るのは・・・寂しいかなって思ってた・・・えー
っと・・・アルフも何か言ってるよ」

フェイトは顔を真っ赤にし、視線を泳がせながらアルフに助けを求めた

「・・・ちよつとからかっただけなのに・・・あんなに怒らなくて
もいいじゃないか・・・」

しかし、フェイトの声はアルフには届かなかった

「・・・えっと・・・ダメ、かな・・・？」

フェイトはアルフに助けを求めるのを諦めて映司に言った

「・・・うん、わかった。今日は一緒に寝ようか」

映司がそう言った瞬間、フェイトは笑顔になった

「アंकに布団貰ってくるから、2人はベストポジションでも探してて?」

そう言って映司は部屋を出て、アंकの部屋に向かった

「アंकく、余ってる布団って何処にある?」

「あ?その辺にあるだろ。適当に持ってけ」

アंकはスマホを弄りながら映司に答える

布団が余っているのは、以前アंकが布団をネットで買った時、アルフが邪魔して数を間違えたからだ

「・・・なあ、アंक。アルフちゃんと何かあった?」

「・・・」

「あつたんだな。何したんだ？」

映司は黙ったアंकに溜息をつきながら訊ねる

「あの犬ところが余計な事を言うからだ」

アंकは寝返りをうって、映司に背を向ける

「・・・まあ、喧嘩もほどにしとけよ？」

「・・・」

「・・・はあ、おやすみ、アंक」

そう言って、映司はアंकの部屋を出て部屋に戻った

部屋に戻ると、既にアルフはベッドのすぐ傍で狼形態になって丸まって眠っていた

映司はベッドの横に布団を敷いて、そこに寝転がる

「・・・映司」

すると、まだ起きていたフェイトが映司に話し掛けて来た

「なに？フェイトちゃん」

「・・・約束して欲しい事があるの」

「約束？」

フェイトの突然の発言に映司は首を傾げる

「もう、絶対に一人で無茶しないで・・・」

「えっ？」

その言葉に、映司はフェイトを見る

フェイトは真剣な表情で映司を見つめていた

「今日は仕方なかったかもしれない。でも、今度からは絶対に１人であんな事しないで」

「・・・ありがとう、フェイトちゃん」

映司は自分の事を本気で心配してくれているフェイトに微笑みながらお礼を言う

しかし――

「でも、俺は大丈夫だから。それに、フェイトちゃんの方がいっつも無茶してるよ？」

「そ、それは・・・」

映司にそう言われ、フェイトは言い返せなかった

しかし、表情からは納得できていないという事がハッキリと伝わって来る

「・・・じゃあ、どうしようか」

「えっ？」

「もし、俺がピンチになったら、フェイトちゃんが助けてよ。その代わり、フェイトちゃんがピンチの時は、必ず助けに行くから。ね！そうしよう？」

「・・・」

映司の提案を聞いて、フェイトは少し考えた

「・・・わかった。じゃあ、映司がピンチになったら、私とアルフが必ず助けに行くよ」

「うん。頼りにしてるよ、フェイトちゃん」

映司は笑ってフェイトにそう言った

「じゃあ、もう寝よう。明日はお母さんの所に帰るんじゃない？」

「うん、そうだね。今度こそおやすみ、映司」

フェイトはそう言って目を閉じた

「おやすみ、フェイトちゃん」

映司はそう言って、布団に預ける

（・・・本当、ありがとう。フェイトちゃん）

映司はもう一度心の中でフェイトへのお礼を呟いた

深夜 3 : 0 0

映司はフェイトが寝たのを確認して、部屋から出てリビングに来ていた

「・・・一人で無茶しないで、か」

映司はフェイトから言われた言葉を思い出し呟く

「お前には難しい注文だなあ、映司」

「アंक・・・起きてたのか・・・」

ソファーに座ってボーっとしながら呟いていると、いつの間にかアंकがリビングの入り口に立っていた

「無茶はお前の癖みたいなもんだ。今更治る訳が無い」

アंकは赤いシートを敷いたソファーにドカッと座り、映司の顔を見る

「・・・思い出したのか？」

「・・・うん、ちょっとね」

アंकに真剣な表情で問われ、映司は苦笑いし答えた

「俺の事を本当に心配してくれたのなんて、お前やグリードのみんな以外に、あの子だけだったから・・・」

映司は自分の右手を見つめて呟く

その右手は小刻みに震えていた

「・・・あの子を失って、もう後悔しないように生きようって決めたけど、結局は後悔だらけの人生だった」

「映司・・・」

映司の悲しげな表情にアंकも顔を顰める

『・・・アंक達との絆を・・・大切にしたい？・・・私には、出来なかったから・・・ね？』

映司の頭に、過去に大切に思っていた人から贈られた言葉が響く

「でも、今更何を言っても過去は変わらない。今は・・・目の前で確かに輝いてる小さな光を護るしかないんだよな。お前とラトやコノハ、シャルにリクとの絆があるんだから。あつ、今はフェイトちゃんともか」

映司は右手を強く握り締めて言った

「・・・フツ、お前が馬鹿で良かった」

そう言う映司にアंकは鼻で笑いながら言った

「おい、アंक。それは酷いぞ」

「本当の事だろうが。変に感傷に浸ってないで、さっさと寝ろ」

そう言って、アंकは部屋に戻って行った

「……ありがとう、アंक」

映司もそう呟くと、部屋に戻って行った

「……緊急事態発生、どうしよう……」

午前6：30

映司を未曾有の事態が襲っていた

「す……す……」

「……何で、フェイトちゃんの顔が目の前に？」

そう、フェイトがベッドから落ちて、映司の布団に入り込んで来ていたのだ

フェイトは映司の腕を枕にして気持ち良さそうに眠っている

「・・・どうしたらいいんだ・・・」

昨夜とは違う悩みを、目覚めた直後に抱える映司だった

因みに・・・

「お肉だ〜・・・」

「・・・いであでで!!!!?」

アंकはいつの間にか部屋にいたアルフに肉と間違えられて腕を噛まれていた

「いい加減にしろ!この犬っころ!!俺は肉じゃない!!」

「うん．．．まずい．．．」

「．．．」

プチッ――

アंकの中の大事な何かが切れる音がした

アルフをアंकが叩き起こしたのは言うまでもない

第6話『約束と思い出と分身コンボ』（後書き）

C o u n t T h e M e d a l s !

現在、オーズが使用したメダルは？

『タカメダル』×3

『クジャクメダル』×3

『トラメダル』×1

『チーターメダル』×1

『クワガタメダル』×1

『カマキリメダル』×1

『バツタメダル』×1

『ウナギメダル』×1

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3068x/>

魔法少女リリカルなのは～仮面の戦士～

2011年11月8日02時09分発行